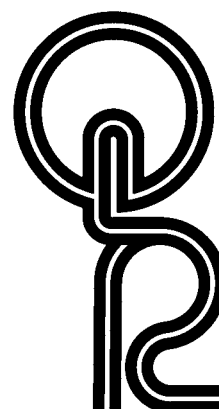


# QR Newsletter

## 第四紀通信

Vol. 20 No.5, 2013



AT テフラを挟在する出来島海岸の泥炭層露頭 (2013年弘前大会巡検 撮影: 菅谷真奈美)

---

---

Vol. 20 No. 5

October 1, 2013

---

新会長、新副会長挨拶	2	第1回幹事会議事録	16
新役員名簿	3	東海地震防災セミナーのお知らせ	16
2013年大会報告	3	評議員会議事録	17
学会賞・学術賞報告	4	総会議事録	28
論文賞・奨励賞報告	8	会員消息	28
大会シンポジウム報告	12	第四紀研究電子付録に関する投稿規定 の改正について	28
巡検報告	13	公開シンポジウムのお知らせ	32
研究委員会等報告	13		
第6回幹事会議事録	16		

---

---

### ◆新会長挨拶



小野 昭 (明治大学黒耀石研究センター)

本会は「第四紀を中心とする諸問題を、関係各分野の協力により解明し、第四紀学の進歩と普及をはかることを目的とする」と、会則第2条で規定し、第3条でその目的達成のための事業を6項目にわたりあげています。

10年前とは質的に異なって、日本第四紀学会の活動の範囲は拡大し、事業項目も多様化し、また担わなければならない課題も著しく増加しています。幹事会をはじめ執行部は文字通り手一杯の状態です。

特に新執行部は、2015年に名古屋で開催される国際第四紀学連合 INQUA 第19回大会を成功させるために最大の努力を払う覚悟です。おそらく50年から60年サイクルでしか招致できない機会であり、日本の第四紀研究を世界に情報発信する最大の好機ととらえ、特に若い研究者が文字通り国際的な研究を肌で感じてステップアップしていく場と捉えてほしいと思います。

本会にも様々な社会的要請が数多く寄せられるようになり、期待される場所は少なくありません。しかし同時に、新しい学会や様々な連合組織の設立、人口減に伴う若手研究者人口の減衰、不安定な職域の量的拡大、研究業績の評価にかかわって日本語を中心とした機関誌のかかえる様々な困難など、本会だけの問題ではない共通の地盤を抱えています。

今期はこうした状況に対して、いくつかの委員会を立ち上げ検討を開始します。全体的に期待に応え展望を示すことと同時に、様々な組織的な困難を克服しなければならない状況の中で、新会長に選出されたことは、私として大変光栄に存じます。幹事会と会員、また会員相互を結びつける太いパイプである機関誌『第四紀研究』に、本学会の多様な分野の成果が反映されるよう努めたいと思います。

困難が多いということは、逆にチャンスも大きいと気宇壮大に捉えなおして、会員の皆さまのご協力を得て課題に取り組みたいと思います。よろしくお願い申しあげる次第であります。

### ◆新副会長挨拶



奥村晃史 (広島大学大学院文学研究科)

第四紀のグローバルで学際的な研究は現代の科学と人類にとって極めて大きな意義を持っています。日本第四紀学会は、この重要な研究を促進し学界と社会に発信していくという重要な使命をもっています。今、日本第四紀学会は2015年夏に名古屋で開催される INQUA (国際第四紀学連合) 第19回大会の準備を進めています。この大会は世界の第一線の研究者との交流を通して日本の第四紀研究の飛躍的な発展と世界への発信を可能とする、最高の機会です。私は大会組織委員会の副委員長と INQUA の副会長とを兼ねているので、2015年 INQUA 大会により多くの第四紀学会会員が参加して世界の第四紀研究者と交流、議論、発信ができる環境を作れるよう力を尽くしていきたいと思っています。

名古屋大会にむけて期待が高まる一方で、日本第四紀学会では、会員数の減少と第四紀研究投稿論文数の低迷の傾向になかなか改善の兆しが見えないでいます。2015年 INQUA 大会は、学会活性化の大切なきっかけになるものと信じていますが、一時の盛り上がりの後、再び退潮に戻らないようにしなければなりません。そのためには、学会と学会誌の魅力を高め、研究者を惹きつける学会づくりを今から継続的に続けていく必要があります。

2011年東北太平洋沖地震と津波災害を受けて、私が専門とする地震・活構造の研究分野でも、第四紀研究の果たす役割が大きくなっています。津波堆積物や液状化など、地層だけに記録された巨大地震や直下型地震の痕跡の分析や、古地震の復元など従来からの研究が改めて注目を集めています。また、原子力施設での地震や地殻変動、断層変位の評価にも学会を窓口として学会員が携わるという、今までにない形での政府と社会への関わりも生じてきました。自然災害や環境変動、地盤や土壌などに関する問題で、学会と学会員が社会に対して説明責任を負う場面はこれからも増え続けるでしょう。正しい科学的な情報を適切に社会に発信していくことは、日本第四紀学会にとっても重要な課題であり、その推進にも努めていきたいと考えています。

## ◆新副会長挨拶



齋藤文紀（産業技術総合研究所）

国際第四紀学連合（INQUA）第19回大会の2015名古屋大会の組織委員長を拝命し、更なる要職は無いであろうと思っていたら、副会長の任に就くことになりました。この任期中にINQUA大会を迎えることになります。INQUA大会の成功は、日本第四紀学会との連携と、学会員の皆様のご支援・ご協力無くしてあり得ません。副会長にご推薦頂いたのは、大会成功のための、皆様のご支援の意思表示と受け止め、副会長と組織委員長、共に努力致しますので、会員の皆様、評議員の皆様には、引き続きご協力をお願い申し上げます。

日本第四紀学会も60周年が近づいています。50周年の際に、顕彰などを追加し、一部の体制や制度を新たにしましたが、INQUAを機に若い力を取り入れて、更なる発展ができるような機構に変える時期にきているように思います。過去から現在、そして未来へつながる学際的な第四紀学とその発展のためには、今よりも更に現行過程の学問との連携を強化し、関連分野との超学際的な研究を推進することが重要です。より魅力的な学会になるよう、広くご意見を伺いつつ取り組んでゆきたいと思います。会員のための学会ですので、些細な事柄でも結構ですので、忌憚ないご意見をお寄せ頂けますよう、お願い申し上げます。日本第四紀学会と第四紀学の発展のために、会員の皆様のご支援を心からお願い申し上げます。

## ◆日本第四紀学会 2013～2014年度役員名簿

2013年8月1日～2015年7月31日の新しい役員と評議員が以下のように決まり、新しい体制でスタートいたしました。

会長：小野 昭

副会長：奥村晃史、齋藤文紀

会計監査：久保純子、竹村恵二

幹事：水野清秀（幹事長）、北村晃寿（庶務）、佐藤宏之（庶務）、岡崎浩子（会計）、卜部厚志（編集）、藤原 治（編集）、齋藤めぐみ（広報）、出穂雅実（行事・企画）、小森次郎（行事・企画）、米田 穰（行事・企画）、吾妻 崇（渉外）、宮内崇裕（渉外）

評議員（41名）

共通分野（5名）：奥村晃史、齋藤文紀、鈴木毅彦、竹村恵二、山崎晴雄

地質学分野（8名）：卜部厚志、岡崎浩子、里口保文、白井正明、長橋良隆、藤原 治、水野清秀、三田村宗樹

地理学分野（6名）：吾妻 崇、植木岳雪、海津正倫、久保純子、須貝俊彦、宮内崇裕

古生物学分野（4名）：北村晃寿、河村善也、澤井祐紀、辻 誠一郎

動物学分野（2名）：池田明彦、本川雅治

植物学分野（2名）：高原 光、松下まり子

土壌学分野（2名）：吉永秀一郎、渡邊眞紀子

人類学分野（2名）：小池裕子、松浦秀治

考古学分野（4名）：出穂雅実、小野 昭、工藤雄一郎、佐藤宏之

地球物理学分野（2名）：阿部彩子、小荒井 衛

地球化学分野（2名）：中村俊夫、横山祐典

工学分野（2名）：陶野郁雄、八戸昭一

## ◆日本第四紀学会 2013年大会報告

弘前大学（青森県弘前市）において、8月22日（木）～24日（土）の3日間にわたり、日本第四紀学会2013年大会が開催されました。一般研究発表は22日と23日の2日間にわたって行われ、口頭39件、ポスター34件の発表がありました。24日（土）午前には公開シンポジウム「考古遺跡

からみた津軽の人と自然」が行われました（詳細は本号のシンポジウム報告をご覧ください）。大会参加者数は、22・23日の一般発表が、会員107名（一般会員85名、学生会員18名、70歳以上会員4名）、非会員25名（うち学生11名）の計132名、24日の公開シンポジウムが60名でした。

一般研究発表では、2011年徳島大会からはじまった若手・学生会員を対象とした発表賞の選考が行われ、口頭発表については会長から推薦された10名の会員による審査投票が、ポスター発表については大会参加者全員による投票が行われました。口頭発表の審査とコメントをお引き受けいただきました阿部（大内）彩子、檜垣大助、鎌田耕太郎、北場育子、久保純子、里口保文、菅沼悠介、中川 毅、中村由克、三浦英樹の各会員には、この場をお借りして御礼申し上げます。

22日の夜には評議員会（出席者20名、委任状提出者20名）、23日午前には総会（出席正会員70名、委任状提出者191名、名誉会員1名）が開催され、2012年度の事業・決算・会計監査、各種委員会・各研究委員会等の報告と、2013年度事業計画、予算案等の審議が行われ、承認されました。総会終了後、学会賞3件、学術賞2件、論文賞2件、奨励賞2件の授与式がありました。

23日の夕方には、弘前大学創立50周年記念会館2階にて懇親会が開かれました（参加者75名）。遠藤前会長と奥村副会長（小野会長代理）の挨拶、竹村前副会長の乾杯の発声から始まった懇親会は、地酒と地元の新鮮な海の幸とも相まって和やかに進み、学会賞・学術賞・論文賞・奨励賞受賞者の挨拶、若手・学生発表賞の授与式（口頭発表賞＜若手部門＞：大石雅之さん、口頭発表賞＜学生部門＞：高橋智佳史さん、山田圭太郎さん、ポスター発表賞＜若手部門＞：近藤玲介さん、石村大輔さ

ん、ポスター発表賞＜学生部門＞：三浦知督さん、植村杏太さん）、次回2014年東京大学柏キャンパス大会会場校代表の須貝会員の挨拶、檜垣大会実行委員長の挨拶を経て、最後は小岩大会事務局長の挨拶で締めくくられました。若手・学生発表賞受賞者の7名の会員には、賞状と副賞（弘前大学が台地化した扇状地上に立地していることに因み、金魚ねぶたがプリントされた扇子と、代表的な津軽弁とその翻訳がプリントされている手ぬぐい）が贈呈されました。

大会終了後の25日（日）には、「津軽平野とその周辺域の第四紀地形・地質と縄文遺跡」をテーマに巡検が行われました（参加者17名、案内者5名、補助スタッフ3名の計25名と現地説明者1名）。バス1台を使用して、海岸段丘と砂丘、最北端のAT露頭や津軽の考古遺跡・地すべり地などを巡り、昼食では、十三湖のシジミラーメンに舌鼓をうちました（詳細は本号の巡検報告をご覧ください）。

最後になりますが、お忙しい中、早くから大会準備を進めていただき、心のこもった素晴らしい大会運営を行っていただきました開催校の弘前大学・檜垣大助会員、小岩直人会員、亀井 翼会員、鎌田耕太郎会員、柴 正敏会員、弘前学院大学・北村 繁会員をはじめとする運営スタッフの皆様に、心より御礼申し上げます。

（前行事・企画担当幹事 高田将志）

## ◆学会賞・学術賞受賞者選考報告（学会賞受賞者選考委員会委員長：百原 新）

### （1）選考経過

2013年の学会賞等の候補者の推薦・立候補は1月31日をもって締め切られ、それまでに学術賞に3名、学会賞に3名の候補者が推薦され、学会賞受賞者選考委員会（百原 新委員長、池田安隆・河村善也・佐藤宏之・米田 穰各委員）にて検討された。選考委員会では推薦のあった候補者について日本第四紀学会学会賞規定、同内規に基づき、推薦文書に加え、学会幹事および選考委員が収集した業績目録や学会活動等に関する資料を参照して審議を行った。なお、選考に当たり、学会賞は第四紀学会正会員としての「学術的な業績」・「第四紀学に貢献した活動」・「学会に貢献した活動」を選考基準とし、学術賞は日本第四紀学会正会員としての「学術的な業績」を選考基準とした。電子メール上での意見交換を経て4月19日に東京大学文学部で開催された選考委員会で受賞候補者を決定した。その後、5月23日に行われた評議員会において、下記の通り受賞者が決定された。

### （2）受賞者

#### ●学会賞

受賞者名：岩田修二

受賞件名：「山岳氷河地形と堆積物および山と人間活動に関する一連の研究」

受賞理由：岩田修二会員は、日本やヒマラヤ、南極など世界各地の山岳氷河や極地をフィールドとして、周氷河地形や氷河地形に関して、氷河そのものの性質や形態、氷河がつくった浸食地形や堆積地形を研究し、氷河地形の体系を構築した。このような研究の成果は、多くの論文や多くの著書にまとめられており、研究の集大成とも言える大作『氷河地形学』が東京大学出版会から2011年に出版されている。また1981年には、ヒマラヤでの研究が高く評価され、日本学術振興会から第17回秩父宮記念学術賞を受賞している。そのほか、第四紀や地理、山岳に関する教科書や入門書を数多く出版している。さらに、山地地形と人間活動の関係や山岳地域の環境保全に関しても精力的に研究活動を行ってきた。岩田修二会員は、日本第四紀学会の評議員を8期務めたほか、庶務幹事、会計監査、第四紀研究編集委員、論文賞受賞者選考委員会委員長、50周年記念事業実行委員会委員、法務委員会委員も務めた。また、日本学術会議地質科学総合研究連絡委員会第四紀学専門委員会の委員長も務めた。『地球史が語る近未来の環境』（2007年、東大出版会）など、第四紀学会の出版物においても多大な貢献を行ってきた。

以上のように、第四紀学と本会の発展に多大な貢献をなしてきた岩田修二会員の功績は、日本第四紀学会学会賞にふさわしいと判断する。



＜受賞者の言葉＞岩田修二 .....

伝統ある日本第四紀学会の学会賞をいただき、たいへん光栄に存じます。山岳の研究をするようになったきっかけは、明治大学4年生の学年末に、なかなか卒論テーマが決まらない私に業を煮やされた岡山俊雄先生の一言、『君の一番よく知っている場所をフィールドに選びなさい』によってでした。それで卒業論文を白馬岳高山帯で書くことになり、山で研究することが始まったのです。

それまで山登りに明け暮れていて単位不足の私は、5年生の7月に、本来履修すべき2年生に混じって、非常勤の貝塚爽平先生の「考古学特説（第四紀学）」の集中講義に出席しました。貝塚先生の講義によって第四紀研究のおもしろさに惹きつけられ「砂に水がしみこむように」理解できたと感じました。大学院は貝塚先生のところで勉強しようと決め、都立大学を受験したら、面接試験で貝塚先生に「君は山登りに来るのかね、勉強に来るのかね」と質問されました。「もちろん勉強です」と答えると「じゃあ修論は平野で書くね」と念を押されました。しかし、根釧原野での修論調査と並行して、白馬岳での調査やパタゴニアの氷河研究も秘かに続けていました。

博士課程の1年目のときに、ヒマラヤでの調査に誘われ、ひんぱんに長期間ネパールに行くようになりました。貝塚先生は渋い顔をされていました。あるときヒマラヤ氷河研究グループの樋口敬二先生が名古屋大学での地形学の特別講義に貝塚先生を招いてくださいました。それ以後、貝塚先生は私のヒマラヤ調査を認めてくださるようになりました。

その後、私は、ほぼ1年おきに、世界各地の山や氷河へ調査に出かけていました。「できる範囲で」ですが、まじめに調査し、かならず報告を書くことをくり返していると、次つぎに海外調査のお座敷が掛かったのです。これが、「趣味でやっている」と言われながらも、好きな山で研究を続けてこられた理由でしょう。

私の氷河や山の研究は、単独でおこなったものはひとつもなく、グループでの調査や共同研究ばかりです。多くの先生がたや、先輩・友人たち、後輩・学生諸君のお陰です。今回の受賞は、寒冷地形談話会・高山地形研究グループ・ネパールヒマラヤ氷河学術調査・ヒマラヤ地殻変動調査・セールロンダーネ山地地学調査・熱帯高地環境利用研究・上高地自然史研究会・ブータン氷河湖調査などのメンバーとの共同受賞であると考えて、みなさまに深く感謝いたしております。

●学会賞

受賞者名：海津正倫

受賞件名：「沖積低地と自然環境変化に関する一連の研究」

受賞理由：海津正倫会員は、日本における沖積低地の総括的な研究から、完新世の海水準変動の研究を精力的にすすめ、さらにアジア各国における沖積層研究にも大きな業績を残した。特に、1994年に出版された『沖積低地の古環境学』や、2012年に出版された『沖積低地の地形環境学』などにその研究成果をまとめ、日本の沖積低地研究を牽引してきた。その総合的な成果は、考古学や人類学などの過去の人間活動にかかわる研究分野にも活用され、第四紀学に大きく貢献したと評価される。バングラデシュにおけるガンジス・ブラマプトラデルタの研究では、はじめてボーリング調査による研究を推進し、その後の研究の基礎を築いた。また、近年は同地におけるサイクロンの影響や被害、スマトラ沖地震津波など突発的な自然現象による海岸平野のダイナミックな変化、さらに地球温暖化による海岸平野への影響など、自然災害や防災、環境保全の観点からの海岸平野研究を先導している。また第四紀学会評議員を8期務めたほか、広報幹事、第四紀研究編集委員、海岸・海洋プロセス研究委員会代表、学術会議第四紀研連委員を務めるなど学会への貢献も大きい。

以上のように、第四紀学と本会の発展に多大な貢献をなしてきた海津正倫会員の功績は、日本第四紀学会学会賞にふさわしいと判断する。



＜受賞者の言葉＞海津正倫 .....

このたびは日本第四紀学会学会賞を授与いただき大変光栄に存じます。私が沖積低地に興味を持ったのは、学部時代に大矢雅彦先生のもとで空中写真判読を習ったことに始まります。当時は激しい大学紛争の真っ最中で、ロックアウトなどによって授業も正常に行われない状況でしたが、平川一臣（北大）さんや貞方昇（山口大）さん達の卒論の手伝いで炎天下の水田地帯へでかけてハンドボーリングをし、地下の堆積物にさまざまな特徴があることを知ったことはとても新鮮でした。その後、吉川虎夫先生・阪口豊先生を指導教官として院生生活を始めました。当時の大学院には上杉陽さん、遠藤邦彦

さん、大森博雄さんなどがおられ、第四紀学的な観点を思う存分たたき込まれました。そのようなことから第四紀学としての沖積低地研究への思いが日増しに強くなり、とうとう博士課程進学時の口述試問で、卒論から続けていた陸水学の研究をやめて第四紀学的な観点から沖積低地を研究したいと訴え、なんとか博士課程に入れてもらったのが、私の沖積低地研究の始まりでした。最初に取り組んだ調査地域は津軽平野でした。幸運にも調査に訪れた夏の日に異常渇水によって河床が露出していて、そこに多数の切り株状の埋没林の痕跡を見つけました。夏休みあけの院ゼミで報告した所、当時助手だった米倉伸之先生がぜひ「第四紀研究」に投稿しなさいと勧めてくれ、それが第四紀関連の最初の論文になりました。さらに、珪藻分析を導入しながらより時空間的に地形変化を把握出来ないかという観点で研究を進め、地理学評論に津軽平野の地形発達史の論文を投稿しました。その後は日本各地の沖積低地の地形発達についてまとめ、さらにガンジスデルタなどへと研究地域を広げていきました。最近では沖積層の研究から人間活動と関わる自然災害などへと研究が広がっていますが、そのような過程で、井関弘太郎先生、太田陽子先生、前田保夫先生、松島義章先生をはじめとする多くの先生方と一緒に仕事をさせていただき、さまざまな刺激を与えていただきました。また、名古屋大学では院生諸君と一緒に仕事をすることができ、何人もが立派な研究者として成長してくれました。現在の奈良大学でも学生や院生諸君に教えられることが多く、現在私があるのも、そして、このような立派な学会賞をいただけたのもこれら多くの方々を支えられてきたことによるということであらためて感じている次第です。

## ●学会賞

受賞者名：陶野郁雄

受賞件名：「自然災害に対する第四紀学の応用的研究への一連の貢献」

受賞理由：陶野郁雄会員は、本学会においては数少ない工学分野の会員として自然災害研究分野における第四紀学の重要性を早くから指摘するとともに、地盤工学会や土木学会など関連学会においては第四紀学の重要性を啓発する活動を長年にわたって続けた。1978年宮城県沖地震以降は、地震に伴う液状化や圧密現象の研究において、実験と野外観察の両面から大きな貢献をした。同氏はさらに、こうした現生の液状化現象に関する詳細な研究に基づいて過去の液状化痕跡と古地震活動とを結びつけることを可能とし、地震考古学の分野を開拓することにも貢献した。これら一連の研究は、数多くの原著論文・報告書・著書等にまとめられ、とくに第四紀学に関連の深いものとしては、『地盤沈下とその対策』（共著、1990年、白亜書房）、『地質・地形条件に基づく液状化ポテンシャル』（2000年、第四紀研究39巻）、『デジタルブック最新第四紀学』（2009年、第四紀学会）などがある。陶野郁雄会員は、1981年から14期28年間にわたって工学分野の評議員を務めた。その間に、1995年兵庫県南部地震の直後には他学会に先駆けて調査速報会を開催し、また2008～2012年には「地球温暖化問題を検討する研究委員会」の代表として各地でシンポジウムを開催したほか、本学会が主催・共催する多くのシンポジウムを組織し、本学会の運営と研究成果の普及に貢献した。

以上のように、第四紀学と本会の発展に多大な貢献をなしてきた陶野郁雄会員の功績は、日本第四紀学会学会賞にふさわしいと判断する。



### <受賞者の言葉>陶野郁雄

この度は学会賞を頂き大変光栄に存じます。

1962年のことですが、時々お宅におじゃましておりました藤本治義先生に地形・地質を反映した都市計画をしてみたいので、役に立つ地質学を教えてくださいと先生を紹介して頂けませんかと申し上げたところ、非常に幅の広い知識を持っておられる原口久萬先生をご紹介下さりました。原口先生をお訪ねしましたところ、「君、砂上の楼閣という言葉を知っているかい。地震によって砂層が流動化するのだよ。」というお話を伺いました。まさに目から鱗でした。それから数時間、先生の京都大学の学生時代にご覧になった1927年北丹後地震などいくつかの地震による液状現象についてお話を伺いました。

このことがきっかけとなり、先生の研究室の一員に加えて頂けるようになりました。私が実際に液状化現象を見たのは1964年新潟地震が最初でした。しかし、本格的な調査研究を始めたのは1967年に東京工業大学建築学科の助手になったときからです。新潟地震の液状化地点で調査を始めました。1968年えびの地震の時でした。小林啓美先生が「九州で大きな地震が発生した。直ちに先発隊を派遣する。」とおっしゃり、幸いにもその一員に加わることが出来ました。その日の大阪発の夜行寝台に乗れるように4人で新幹線に飛び乗ったことを思い出しました。その後は液状化が生じるような大地震が発生したらいつでもすぐに飛び出せるように準備をしていました。幸い山形大学を定年退職するまで続けることが出来ました。

1967年頃は全国で地盤沈下が顕著に生じていました。東京都の青木 滋先生から助手になったのだから地盤沈下も手伝えと声をかけられたのがきっかけでした。その後、関東平野・濃尾平野・大阪平野・筑後佐賀平野・新潟平野の地盤沈下に関してもお手伝いをさせて頂くことになり、数え切れない

いほどの土試料の土質試験を行うことが出来ました。そのことにより、堆積年代と地盤物性の関係などを導けるようになり、1971年からのいろいろな論文を書くことが出来ました。

40歳になったら多くの研究者のためになるような何かをしようと思い、考えたのが理学と工学との融合でした。その頃、国立公害研究所に地盤沈下研究室ができるので、その室長にとのお話を頂きました。まず科研費を地盤沈下と液状化現象で研究代表者として申請し、幸いに2つとも当時としてはかなりのお金を研究費として頂くことが出来ました。尤も地盤沈下では名古屋大学土木の植下協先生や山形大学農学部の東山 勇先生、液状化では東大地震研の伯野元彦先生に研究分担者の一人となって頂いたおかげでした。理学と工学との融合では、沖積層・火山災害・地盤災害・地球環境などについて行ってきました。沖積層の研究に際しては、東京・名古屋・大阪・九州の4つの部会を設けることができ、理学・工学・農学の分野から200名以上の方々にメンバーとして参加して頂きました。

1983年日本海中部地震が発生した際、桑原 徹・上杉 陽・遠藤邦彦・白石建雄の諸先生方を初めとした多くの方々に協力頂き、様々な調査研究を行うことが出来ました。それ以外の災害調査研究に際しても多くの方々に協力して頂きましたことがこの受賞に繋がったものと思います。

今までにご教示、ご協力を賜った千名を超す方々に心から御礼申し上げます。誠に有難う御座いました。

## ●学術賞

受賞者名：久保純子

受賞件名：「河川地形環境の変遷に関する研究とその多面的な応用」

受賞理由：久保純子会員は、これまで長年にわたり、地道なフィールドワークを通して、関東地方および東南アジア地域の河川を中心とした古環境変遷の研究を精力的かつ系統的に進めてきた。その一連の研究成果により、河川中・下流域の地形発達史を軸として、地形学と考古学・歴史学を有機的に結びつけることに成功している（例えば『後期旧石器時代の成立と古環境復元』共著、2008年、六一書房）。久保純子会員は、応用地形学的研究においても、防災に対して地形学が大きく貢献できることを示しており、特筆されるべきであろう（『日本の地形・地盤デジタルマップ』共著、2005年、東大出版会）。また、久保純子会員は、河川地形や古環境に関する概説として、『川の百科事典』（共著、2009年、丸善）、『自然地理学概論』（共著、2008年、朝倉書店）、『地形分類図の読み方・作り方』（共著、1998年、古今書院）などを執筆してきた。さらに、そうした一般の概説書にとどまらず、市町村史のような自治体史に積極的に執筆していることは、第四紀学が果たすべき社会連携・還元という意味で重要な貢献である（『相模原市史 自然編』共著、2009年、市史編纂室；『我孫子市史 原始・古代・中世編』共著、2005年、我孫子市教育委員会；『三郷市史 水利水害編』共著、2001年、三郷市）。

以上のように、第四紀学に多大な貢献をなしてきた久保純子会員の業績は、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。



### <受賞者の言葉>久保純子

このたびの日本第四紀学会学術賞授賞のお知らせは、大きな驚きでした。「第四紀研究」や著名国際誌に論文多数、というわけでもないのになぜ、というのが正直な感想でしたが、推薦いただきました方や選考委員会の皆様、これまでお世話になった多くの方々にお礼を申しあげる機会として、謹んでお受けいたします。改めまして、このような賞をいただいたことはまことに光栄で、皆様に深く感謝いたします。

関東平野や東南アジアの河川・平野の研究は、早稲田大学教育学部で故大矢雅彦先生の、東京都立大学大学院で故貝塚爽平先生と町田 洋先生の教えを受けたことが出発点です。大矢先生には沖積低地の微地形と洪水災害や地

震災害について、貝塚先生と町田先生からは低地だけでなく台地の地形と堆積物、そして第四紀の環境変化の中での地形形成史を学びました。

1995年に相模川下流の埋没段丘の研究で東京都立大学より学位をいただき、学位論文の主要部分を「第四紀研究」に投稿し、論文賞（当時）をいただきました。爾来、第四紀学会からはさまざまご縁、ご恩をいただいています。

東京低地の研究では、多くの歴史学や考古学関係者の方と交流できるようになりました。また、自治体史の編纂にもお声がけいただきました。東大出版会の『日本の地形関東・伊豆小笠原』では相模川と荒川下流の地形を担当させていただきました（荒川の部分の共著者としてご指導いただいた小池一之先生が弘前で急逝されたことはまことに残念です）。また、教科書や事典の執筆の機会もいただきました。このほか、『日本の地形・地盤デジタルマップ』では地形学から地盤工学や防災分野への応用にも加わりました。

バングラデシュやカンボジアでは地形と洪水の調査、ベトナム・カンボジア・ラオスでは遺跡調査に参加して地形の調査を担当しました。2010年からはインド東海岸のゴダバリ・クリシュナデルタの調査も始めました。これらも多くの方のお声がけ、お力添えにより実現したものです。

## 学術賞

第四紀学会はさまざまな専攻分野の会員が意見を交換できる貴重な学会と思います。Nature など海外のトップジャーナルに論文が掲載される会員もたくさんいらっしゃいますし、地域の土地の歴史や人類の活動についてお教えいただいたり、学校や社会で第四紀の研究の意義を伝えたりと、さまざまな活動がおこなわれています。これらの活動がますます活発になりますよう、若手の方々に応援し、(おもに後半の部分で) さらに努力したいと思います。このたびは本当にありがとうございました。

### ●学術賞

受賞者名: 中川 毅

受賞件名: 「後期更新世における古気候学、年代学の高度化への貢献」

受賞理由: 中川 毅会員は、初期の段階から水月湖年縞堆積物研究の中心メンバーとして活躍し、高解像度花粉分析に基づく気候変動の時期の地域差 (2003 年 Science 299) や東アジアモンスーンの融氷期気候への応答の季節変化 (2006 年 Geology 34) などの成果を国際誌に発表してきた。一連の研究の中で、花粉化石データから古気候を定量的に復元するモダンアナログ法の日本におけるデータベースの構築とその解析法や、解析ソフトの開発も行った (2002 年 Quaternary Science Reviews 21 など) ほか、それらの成果をウェブサイトで公開し、定量的古気候復元法の普及を積極的に行ってきた。特に 2006 年から推進した国際共同研究プロジェクト (2012 年 Science 338、Quaternary Science Reviews 36) では、採取した全長 73m のコア SG06 について約 7 万年分の年縞を高精度で計数し、樹木の葉化石の放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定を高密度間隔で行うことで、約 5 万年前までの  $^{14}\text{C}$  年代校正データを出した。樹木年輪による  $^{14}\text{C}$  年代更正可能範囲を超えた古い  $^{14}\text{C}$  年代の校正には、これまでカリコ海盆の年縞のデータが用いられてきたが、海洋リザーバー効果の影響を受けていない水月湖の年縞のデータの方が優れている。そのため、2012 年 7 月にパリで開かれた世界放射性炭素会議総会においてコア SG06 から得られた  $^{14}\text{C}$  年代校正データが国際標準データセット IntCal に採用されることが決まった。今後、SG06 のデータが世界中で使われ、広範な分野の研究の発展に寄与することが期待される。中川 毅会員は、日本のマスコミによる報道や各地での講演活動を通して、国内における第四紀学の普及に大きく貢献している。

以上のように、第四紀学に多大な貢献をなしてきた中川 毅会員の業績は、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。



＜受賞者の言葉＞中川 毅 .....

このたびは名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。どうもありがとうございました。受賞理由として挙げていただいた貢献は大きく分けて、1) 花粉データを用いた定量的な気候復元手法の開発と普及、2) 水月湖年縞堆積物の分析を通じた地質年代学の高精度化、の 2 点であると思います。これらは、私が 2000 年ごろから取り組んできた一連の仕事のうち最も力を注いだ部分であり、その点を第四紀学会で評価していただけたことには一定の感慨があります。

花粉データを用いた定量的な気候復元は、90 年代前半頃から花粉学の世界で存在感を増してきました。しかし、個々の分類群の生態学的な特徴を無視したアプローチが従来の花粉研究者に忌諱されたこと、またコンピュータの

性能が今ほど高くなく、誰にでも使いやすいツールが用意されていなかったことなどの理由で、初期の普及のスピードは決して早くありませんでした。じつは私自身も、はじめはこの新しい流れに与することに強い躊躇を感じた一人です。おかげさまで、私が気候復元のために開発したソフト (Polygon) は世界中でユーザーを獲得し、操作が容易であるとの評価をいただいています。私がそのようなツールを開発できた理由としては、自分自身が後発部隊であり、どこに心理的な壁があるかを理解していたことが大きいように思います。近年では、第四紀学会でも若手を中心に Polygon の使用例を目にすることが増えてきました。当時の私が感じていた壁を、少しでも低くすることができたのであれば率直に嬉しく感じます。

水月湖の研究は、歴史的には国際日本文化研究センターの安田喜憲先生、また名古屋大学の北川浩之先生によって最初に筋道が示されました。私の貢献は、とくに北川先生の研究プログラムを実現するために妥協のないクオリティのコアを採取したこと、またそのコアを現代的な手法で妥協なく分析するために、国際的なエキスパートのグループを作り、かつ指揮したことだと思います。北川先生は、あるいは時代の先を行きすぎているのかもしれませんが。残念ながら当時のコアの質は、北川先生の理想の高さにつり合っておらず、そのためデータも国際標準として認知されることはありませんでした。私のプロジェクトは、いわばそのリベンジでした。年縞を正しく研究するために必要な視点と経験のすべてを与えて下さった北川先生に対し、ここに記して深く感謝を申し上げます。



## ◆論文賞・奨励賞受賞者・受賞論文選考報告（論文賞受賞者選考委員会委員長：卜部厚志）

## (1) 選考経過

会員からの推薦は2013年1月31日に締め切られ、論文賞に対して1件の推薦があった。論文賞選考委員会（卜部厚志委員長、青木賢人、五十嵐八枝子、奥田昌明、高橋啓一各委員）では候補論文について選考を進めた。選考は日本第四紀学会「論文賞と奨励賞選考に関する内規」に基づき下記の手順で行った。本年度の該当論文は全体で38編であり、うち奨励賞該当は6編である。1) 各委員に対して各賞候補となる論文の推薦を依頼（4/8～4/26）。2) 各賞候補の取りまとめ。論文賞候補2編、奨励賞候補2編を選出、委員へ推薦確認の依頼（4/26）。3) 委員からの意見の取りまとめ（5/10）。論文賞2編、奨励賞2編の推薦を決定。論文賞については、独創性・総合性・発展性を重視し、奨励賞については独創性と将来性を特に重視した。なお、選考委員の論文が対象となった場合には、その選考委員はその審議には関与しなかった。最終候補者・候補論文に対して5月23日に行われた評議員会において審議され、下記の通り受賞者・受賞論文が決定された。

## (2) 受賞者・受賞論文

## ●論文賞

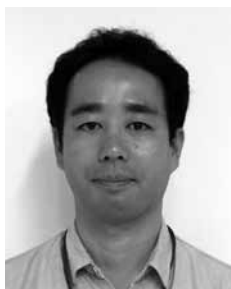
受賞者名：小野映介・片岡香子・海津正倫・里口保文

受賞論文：論説 小野映介・片岡香子・海津正倫・里口保文、十和田火山AD915噴火後のラハールが及ぼした津軽平野中部の堆積環境への影響。51巻6号、317-330頁。

受賞理由：従来の沖積低地を対象とした地形・地質研究においては、海面変動と地形・堆積環境の変化の関連性に議論の中心が据えられてきた。一方、本論文は河川上流域における土砂生産が沖積低地の堆積環境や地形変化に及ぼす影響に注目した点において独自性が認められる。

本論文では、津軽平野中部の考古遺跡およびその周辺を対象とした浅層堆積物の層相、鉱物組成、火山ガラスの形状・屈折率、<sup>14</sup>C年代、遺構や遺物の検出状況から、AD915の十和田火山噴火によってラハールが当地域に及んで微高地を形成したことが明らかにされている。また噴火後、平野中部へのラハールの到達が二十数年以内に生じたことも解明された。河川上流域からの土砂の流動が数十年のオーダーで捉えられた点は、沖積低地の地形発達史研究における大きな成果である。また、ラハールと人々の居住の問題についても言及がなされている点で独創性が認められる。

火山噴火の自然現象についての丁寧な復元と、その人間生活への影響を考察した点に加えて、考古学のサポートを受けた地形学、堆積学、火山学の協同作業によって生み出されたものであり、複合科学としての第四紀学の特徴がよく表れている。よって、本論文は日本第四紀学会論文賞に値すると判断した。



小野映介氏



片岡香子氏



海津正倫氏



里口保文氏

## ＜受賞者の言葉＞小野映介 .....

このたびは日本第四紀学会論文賞を授与いただき大変光栄に存じます。

沖積低地の地形発達史研究は、この三十年程でフレームワークが確立され、更なる発展への転換期を迎えようとしています。そうしたなかで、低地への土砂流入過程を高精度で捉えることができないかと模索しながら調査・執筆したのが本論です。既存の沖積低地研究では海面変動との関連性が重視され、デルタの発達過程の解明が軸となってきました。しかし、筆者らは日本列島に分布する様々な沖積低地の調査を積み重ねるうちに、発達過程の共通性を見出すとともに、バラエティーの存在にも気づき始めていました。

湿潤変動帯に位置する沖積低地の形成は、海面変動とともに上流域からの土砂供給に変化を及ぼすイベント（例えば、内陸直下型地震・火山活動など）の影響を反映していると考えられます。本論では、そうした観点から津軽平野の地形発達を見直し、十和田平安噴火にともなうラハールの流入が氾濫原の地形環境を激変させたことを明らかにしました。この「激変」は第四紀の地形発達史という観点からすれば、微々たる変化です。しかし、沖積低地を人間活動の舞台として捉えた場合、非常に大きな変化であったと推定されます。事実、ラハールの流入によって低湿であった氾濫原には砂地の微高地が形成され、そこに人々が居住したことが明らかになっています。

最後になりましたが、本研究を実施するにあたって青森県埋蔵文化財センターの方々には多大なご協力をいただきました。記して感謝いたします。考古学と自然科学の共同研究は古くて新しい分野です。そこには解明すべき様々な問題が残されており、沖積低地の地形発達史研究の進展の鍵を握っています。この分野を我々とともに開拓する若者が現れることを切に願います。

### ●論文賞

受賞者名：五十嵐八枝子・成瀬敏郎・矢田貝真一・檀原 徹

受賞論文：論説 五十嵐八枝子・成瀬敏郎・矢田貝真一・檀原 徹、北部北海道の剣淵盆地における MIS7 以降の植生と気候の変遷史—特に MIS6/5e と MIS2/1 について。51 巻 3 号、175-191 頁。

受賞理由：花粉化石による古植生の復元において、沖積層などの新しい地質年代の地層に関しては多くの検討が行われている。本研究の対象である北海道においても、約 32000 年前以降の花粉化石による植生の復元の検討がなされてきたが、MIS4 より古い時代の植生史の復元は断片的であった。

本論文では、剣淵盆地から得られたコア試料において Toya テフラの挟在を確認したことから、これまで放射性炭素年代の測定限界よりも古い時代の有機質粘土層に対して時間軸の特定を行うことができ、花粉化石による MIS7 以降の植生変遷史の復元が可能となった。この結果、MIS7 後半から MIS5e にいたる植生とこれに基づく気候の変化を明らかにした。また、著者らの剣淵盆地でのこれまでの成果（五十嵐ほか、1993；Igarashi, 1996）の再検討と本論での MIS7 以降の検討成果を加えて、氷期から間氷期への移行期である MIS6/5e と MIS2/1 の様相を花粉による古植生と植生から推定される古気候の様相に基づいて、具体的に比較検討し、MIS6/5e と MIS2/1 を比較すると MIS2/1 の移行期の気候は急激に変化したことを明らかにした点も評価できる。さらに、一般の花粉分析の論文と比較して、高解像度の花粉データから、植生の変遷史を復元しており検討内容に説得力がある。目的によっては、詳細な分析が必要であることを実証した点でも高く評価できる研究であると判断できる。よって、本論文は日本第四紀学会論文賞に値すると判断した。



五十嵐八枝子



成瀬敏郎氏

### <受賞者の言葉>五十嵐八枝子 .....

この度は栄えある日本第四紀学会論文賞を賜り、大変光栄に存じます。本論文は北海道北部の剣淵盆地 Site2 における全長 13.5m の掘削試料の花粉分析、<sup>14</sup>C 年代測定およびテフラの同定によって MIS3 前期～5 後期を欠如するものの、MIS7 以降の植生と気候の変遷史を明らかにしたものです。剣淵盆地については、すでに 3.2 万年間の植生史が明らかにされていますが、Site 2 はそれより約 10m 西に位置します。古気候の復元はモダンアナログ法により行いました。それまで氷期の北海道に成立したと推定される植生が分

布するサハリン全土の主な湿原において、表層の花粉データを収集しておりましたが、表層試料採取地域の気象データを完全に揃えることができませんでした。幸いにも本論完成までにそれらが整い、Site2 各帯の花粉組成に類似するサハリンの地域と剣淵の気象データを比較することによって、各帯堆積期の気温や降水量を復元しました。コアの深度 8m 前後に分布する腐植混じり砂層より下位は、亜炭状泥炭が 3.7m の厚さで分布します。挟在する厚さ 6cm の白色火山灰は、共著者の檀原さんにより Toya (112～115 ka) と同定されました。剣淵盆地の第四系は、剣淵層と剣淵低地堆積層からなり、その厚さは盆地中央で 20m に過ぎず、両層は不整合で接するとされます（八幡ほか、1997）。上記の腐植混じり砂層と Toya を挟む亜炭状泥炭の境界がこの不整合とみられました。Toya の年代から見て、その直下に最終間氷期堆積物の存在を期待しましたところ、完新世の組成に匹敵する高率の *Quercus* が検出されたのでした。こうして MIS6/MIS5e と MIS2/MIS1 の 2 回の氷期 / 間氷期の気候変動を比較するデータが揃いました。本コアは平成 15～17 年度科学研究費補助金基盤 (c)「風成塵からみた西日本における最終間氷期以降のモンスーン復元」（代表者成瀬敏郎）によって掘削されました。本研究の年代測定の一部は総合地球環境学研究所プロジェクト・リーダーの湯本貴和教授による「日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討」の補助を受けて行いました。本論分の完成に当たっては多くの方々から暖かい御助力と御教示をいただきました。投稿後は査読者をはじめ編集委員の皆様から有益なご教示をいただき、完成に至ることができました。ここに厚く御礼申し上げます。

### ●奨励賞

受賞者名：竹本仁美

受賞対象論文：論説 竹本仁美・奥村晃史、長野県神城盆地の局所的な地形変化に対する完新世の花粉化石群集の応答。51 巻 1 号、21-33 頁。

受賞理由：本論文は、長野県北西部の糸静線活断層系の神城断層・白馬トレンチ（736m）から採取した試料の花粉分析によって、完新世の断層活動に影響された地形変化に対する花粉化石群集の変動を読み

取り、植生が断層活動により生じた地形変動にどのように影響されたかを調査したものである。これまでも断層による地形の変化が植生の変化をもたらすことは予測されてきたが、花粉組成の変化のみを用いて局地的な地形変動を論ずることは困難とされてきた。

著者らは、花粉組成の特徴から溪畔林、草原、湿地林の3パターンに分類して、断層の運動と地形変化から考察された河床高度変動曲線との対比を検討した。この結果、河床高度の低下による河川流量の増加→溪畔林の成立、河床安定→乾燥による草原の発達、河床高度の低下→湿地林の形成として、堆積環境の変化と植生変化を対応させることができた。こうした視点からの研究はきわめて少ないものであり高く評価されるものである。

本論文は、花粉分析による古環境復元の手法と、変動地形学的成果を組み合わせ、地域環境の変化を複合的に復元している。複数の手法を組み合わせる総合的な分析をしている点が、第四紀学の特徴をよく表している。よって、本論文の筆頭著者である竹本仁美会員は日本第四紀学会奨励賞に値すると判断した。



＜受賞者の言葉＞竹本仁美 .....

この度は栄えある日本第四紀学会奨励賞を賜り、誠にありがとうございました。

受賞の知らせをいただいた時のみならず授賞式のときでさえもまだ信じられないような気持ちでございましたが、賞状をいただいて、自分が取り組んだ研究が奨励賞を受賞したことの重みを実感しております。

論文執筆にあたりまして、共著者にもなってくださいました指導教官の奥村晃史先生を始めとする広島大学地理学教室の先生方、花粉分析の基礎からの指導をしてくださいました京都府立大学の高原 光先生、滋賀県立琵琶湖博物館の林 竜馬様を始めとする皆様には多大なるご指導をいただきました。

また、投稿後に関しまして、丁寧な審査をしてくださいました編集委員および査読者の先生方、最後まで原稿修正に付き合ってくださいました元編集書記の綿引裕子様により、拙い原稿を大幅に改善させることができました。この場を借りて皆様に心より御礼申し上げます。皆様の熱心なご指導、ご助力がなければ本論文を投稿・掲載させることなどできませんでした。

今回賞をいただきました論文は私が広島大学に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものです。長野県北部神城断層の活動とそれに伴う地形発達が花粉化石データに与える影響を論じた研究です。トレンチ壁面から採取された試料を用いた花粉分析結果から、局地的な環境変化を示す分類群がイベントに反応する変動を読み取ることができ、河成段丘などの地形発達ともよく対応しているという成果が得られました。また、断層活動に反応する分類群を抽出できる可能性も見いだされています。非常に興味深く感じているテーマであり、この研究テーマに巡り会えたことに深く感謝しております。しかしまだ課題も残っており、明らかにすべきことが多くあります。

今回奨励賞をいただき、今後も頑張るようにと応援していただいたことは非常に大きな励みとなりました。活躍しておられる諸先輩方に自分も続くことができるよう、第四紀学の発展に貢献することができるよう、より一層気を引き締めて精進したいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうかよろしくお願い申し上げます。

●奨励賞

受賞者名：千葉 崇

受賞対象論文：論説 千葉 崇・遠藤邦彦・増渕和夫、潮間帯における珪藻殻のサイズ分布と珪藻遺骸の堆積過程。50巻6号、279-293頁。

受賞理由：沖積層などの新しい地質年代から古い地質時代の堆積物の古環境を検討する上で、珪藻遺骸群集の現地性・異地性を区分することは重要な課題である。これは、珪藻が運搬されやすいことに起因しているが珪藻の運搬過程の検討のみでなく、季節変化や水質変化による要因も推察され、課題を把握した上での現地性・異地性の実証的な検討が求められてきた。

本論文では、千葉県の小櫃川河口部の潮汐を受ける干潟を対象として、季節変化を考慮した試料採取を行い、現生の地形環境と産出する珪藻遺骸の群集を比較することで、現地性・異地性の判断を行い堆積物の層相と比較検討する点で、新規性と独自性が高いと言える。検討の結果、異地性遺骸群集の個体数と分布は底質のシルト含有率との相関が高く、特定のサイズの珪藻が選択的に運搬されシルト含有率が高い堆積環境で特徴的に堆積していることが明らかとなった。

本論文は、小櫃川河口部の事例検討ではあるが、現生の地形環境が明確な地点で、珪藻遺骸の現地性・異地性の検討を行った着眼を高く評価することで、現地性・異地性の課題解決に向けた先駆的取り組みであると評価できる。よって、本論文の筆頭著者である千葉 崇会員は日本第四紀学会奨励賞に値すると判断した。

＜受賞者の言葉＞千葉 崇 .....

この度、第四紀学会奨励賞を授与して頂き、誠にありがとうございました。本受賞は、多くの方々の御助力無しに成し得たものではありません。共著者として支えてくださった遠藤邦彦日本大学名誉



教授及び川崎市教育委員会の増渕和夫氏、現生珪藻の観察方法を教えていただいた琵琶湖県立博物館の大塚泰介博士、ご指導していただいた東京大学の須貝俊彦教授、分析機器を使用させていただいた日本大学の中尾有利子博士、励ましの言葉を送ってくださった帝京平成大学の小森次郎博士、常に刺激を与えてくださった日本大学第四紀地球環境研究室及び東京大学地球環境変動学分野の学生諸氏に、改めて御礼申し上げます。また、私の未熟さゆえ受理まで長い期間を費やすことになり、多大な御迷惑を御掛けしましたが、最後まで丁寧に対応してくださった査読者及び編集委員の方々に深く御礼申し上げます。そして、故小杉正人博士が日本大学に残された試料、文献類及び研究成果の存在が、私が珪藻研究に興味を持つきっかけとなりました。また私

にとってそれらは常に研究を行う上での手本でした。故小杉博士に敬意と感謝の意を表します。

賞を頂いた論文は既往研究をサポートする内容ですが、ライフワークとして始めた研究の最初の成果であり、第四紀の古環境を考える上で重要な、珪藻分析、珪藻の指標性を改めて考え直そうという意図に基づいています。1960年代に珪藻分析が沖積層研究へ導入されてから50年が経とうとしています。この50年間で、珪藻分析を取り巻く状況は大きく変化しました。特に塩性湿地環境、湖沼の年縞堆積物などを対象とした研究では、非常に高い精度で、古環境変動を復元することが可能となりました。その一方で、珪藻の分類や、化石化過程の解明には、未だ多くの課題が残されています。しかしながら、こうした課題を解決するためには、古典的な文献に頼る珪藻分析では対応し切れず、別な視点から課題を検討する必要があります。今後はこの受賞を励みに、こうした課題を地道に検討し、第四紀学、珪藻学の発展に寄与できるような研究成果を上げられるよう、一層努力する所存です。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

## ◆日本第四紀学会 2013 年大会 シンポジウム報告

亀井 翼 (弘前大学)

2013年大会では、8月24日(土)に公開シンポジウム「考古遺跡からみた津軽の人と自然」が開催された。当日は60名(内会員38名)の参加者が、津軽平野や津軽半島を対象とした、バラエティ豊かな6本の発表に耳を傾けた。関根達人「津軽の縄文時代—亀ヶ岡文化を中心に—」では、青森県と宮城県における縄文時代の遺跡数の推移が比較されるとともに、縄文時代晩期を代表する考古学的文化である亀ヶ岡文化について概説がなされた。安 昭炫「東北地方北部の更新世末期・完新世の植生史」では、屏風山砂丘における旧期クロスナ層の発達時期と、その前後の植生変遷について報告がなされ、気候の寒冷化を背景として砂丘地では植被による砂丘の固定が、谷部ではトチノキ林の拡大が起こったことが指摘された。根本直樹「津軽半島における新第三紀以降のテクトニクス」では、津軽半島における地質構造と、それ

を反映した地形の形成について報告された。柴正敏「津軽の地質と土器材料」では、縄文土器胎土中の火山ガラスの化学組成を分析し、火山ガラスがどのテフラに由来するかを明らかにすることによって、土器原料の産地(=テフラの分布域)を推定する方法が示された。小野映介・片岡香子「津軽平野の地形発達と遺跡の消長」では、岩木川の扇状地群とデルタの中間に広がる氾濫原について、上位面と下位面に区分されることが指摘されるとともに、遺跡の発掘調査区で行われた地形・地質調査によって、津軽平野の詳細な地形発達史と、遺跡形成の関連性について考察が行われた。鎌田耕太郎「縄文遺物を含む近世の破堤堆積物」では、青森市新田(1)遺跡の発掘調査区で見いだされた破堤堆積物について、堆積層解析の視点から報告がなされた。

パネルディスカッション方式で行った総合討論では、縄文時代の遺跡数変遷と気候、植生、地形の対応が議論されるとともに、考古学と地球科学の協業のあり方にも議論が及んだ。小野氏の発言にあったように、日本において考古学と地球科学には長年にわたる協業関係が築かれてきたが、遺跡における地球科学の研究成果は発掘調査報告書の付編として掲載されるのみで、考古学的な研究に生かされることは少ない。また、日本考古学における詳細な層序区分は、遺物取り上げの便宜として有効であっても、堆積学的には意味のない場合が多いことも指摘された。本シンポジウムが考古遺跡における人と自然の第四紀学を議論するきっかけとなれば、企画・開催校として望外の喜びである。最後になりましたが、シンポジウム参加者の皆様、講師の皆様に厚くお礼申し上げます。



2013年弘前大会公開シンポジウムの様子

## ◆日本第四紀学会 2013 年弘前大会巡検報告

菅谷真奈美（茨城大学大学院理工学研究科）

日本第四紀学会 2013 年弘前大会巡検は、「津軽平野とその周辺地域の第四紀地形・地質と縄文遺跡」をテーマに、8 月 25 日に実施された。案内者は檜垣大助氏（弘前大）、柴 正敏氏（弘前大）、北村 繁氏（弘前学院大）、小岩直人氏（弘前大）、亀井 翼氏（弘前大）の 5 名、これに学生・院生の方々 3 名が案内補助者として加わり、一般参加者 17 名を案内していただいた。

総勢 25 名を乗せたバスは弘前市を出発し、夏雲を被った岩木山を望みつつ海岸へと向かう。津軽半島の西縁は、海岸段丘、そしてそれを被覆する砂丘からなる台地が広く発達しており、その段丘面の形成は中期更新世以降であるとされている。バスでの行路では、各観察地点を經由しながらこの台地地形を南から北上する形で体感することとなった。

最初の観察地点は出来島海岸の海食崖に露出した泥炭層である。この露頭は海岸沿いに 1km にもわたり、下部の褐色の泥炭層が館岡層、湖沼と砂丘の堆積物からなる上部が出来島層に区分されている。館岡層では最終氷期埋没林が、さらにその下位に日本最北の AT（始良丹沢）テフラが挟在している様子が観察できる（表紙写真参照）。堆積物から突き出た木の根は未だ固さを保ち力強く、2 万 5 千年も前に死した樹木とは思えない。

バスは津軽平野を一望できる亀ヶ岡遺跡で一時停車し、五月女菴（そとめやち）遺跡へ向かう。五月女菴遺跡は平成 24 年度に発掘された縄文時代後期～晩期の遺跡であり、まだ調査途中である。地質学と考古学の見解が交錯し、新たな発展が予想できる場面もあった。

さて、巡検といえば地元の食を味わうことも重要な要素である。今回は十三湖畔でヤマトシジミラーメンを頂いた。径が 2cm 以上もあるしじみが



小泊（こどり）半島に分布する活動的な地すべり移動土塊の末端付近を見学する巡検参加者

たっぷり入ったラーメンはスープに出汁がよく出てあっさりとしており、スープを飲み干す参加者も多かった。

最後の停車地点は小泊半島である。ここでは、小泊半島海岸沿いで広く発生し、今も活動を続ける地すべり災害の痕跡を見ることができる（写真）。地質学的には、すべり面の多くは粘土質凝灰岩層であると分かっている。今も年間 27cm の速度で動き続けるこの地域には、かつてあった集落ももはやない。人間にとってどうあれ、地形が更新される様には大きなエネルギーを感じた。

自然が多く残るこの土地は、研究題材の宝庫であろう。参加者の多くがこのことを感じ、よい刺激になったことと思われる。このよき機会を与えてくださった案内者および関係者の皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## ◆研究委員会 2012 年度活動報告

2012 年 1 月から 4 年間の計画で下記の 4 つの研究委員会が活動を行っている。

## ●「最終氷期最盛期における北東アジアの生態系変遷と人類の応答」研究委員会

（代表者：出穂雅実）

INQUA の Humans and Biosphere (HaB) コミッションにおいて採択された 2012 年度プロジェクト Human Technological and Behavioral Adaptation to the Last Glacial Maximum in Northeast Asia (Project No.1206) の国内における対応委員会として、LGM における北東アジアの生態系変遷と人類の応答を具体的に再構成することを目的としている。この目的を達成するため、南シベリア、モンゴル東北部、および北海道の当該時期の発掘調査を実施し、遺物空間分布と石器製作技術等の考古学的分析から行動論的復元をおこなう。さらにこれらの考古学的分析結果を、放射性炭素年代及びテフラ編年による地質学的対比によって LGM の北東アジアの考古学・自然環境データと広く対比し、当該期の人類社会の変化プロセスと要因を明らかにすることを目標としている。

2012 年度は、研究委員会の活動の一環として、2012 年 11 月 30 日に首都大学東京において第 1 回会議 International Workshop: Upper Paleolithic Geochronology around the LGM in Northeast Asia を開催した。発表は 11 件あり、アメリカ 2 名、ベルギー 1 名（発表 2 件）、ロシア 1 名、モンゴル 2 名、日本 4 名である。合計 22 名の参加があった。発表の後には活発な討議が行われ、研究の今日の到達点と今後の方向性を共有することができた。

● テフラ・火山研究委員会

(代表者：植木岳雪)

INQUA, Commission on Stratigraphy and Chronology (SACCOM) の下の International Focus Group on Tephrochronology and Volcanology (INTAV) に対応する日本第四紀学会の組織として、テフラ研究者が情報を交換し、研究を推進することを目的とする。当初 2013 年 3 月に研究集会を行う予定であったが、実施できなかった。そこで 2013 年 11 月 9、10 日に首都大学東京において、首都大学東京と共催でテフラの研究集会を行うよう、現在調整を行っている。また、2014 年春ごろに、野外見学を含めた研究集会を実施することを考えている。

● 古気候変動研究委員会

(代表者：公文富士夫)

INQUA における古気候委員会 (PALCOMM) に対応する委員会として、日本および東アジアを中心とした古気候変動を解明するために活動する。具体的には、1) 5 万年前から現在までの気候変動の高精度解析、2) 中・後期更新世の古気候情報の編年と統合、3) ヒマラヤ・チベットの隆起活動と東アジア・モンsoon 変動の解明、をおもな課題として活動を進めている。

2012 年度は、12 月 21～23 日に福島大学で一般向け講演会「猪苗代湖掘削の成果と第四紀の気候・環境変動」を開催するとともに、上記の 1) と 2) の課題にそった資料の収集の一環としての研究発表および今後の取り組みについての相談のためにワークショップを開催した。研究発表は 9 件あった(集会の様子と講演の概要は第四紀通信第 20 巻 2 号に載せています)。また、今後の研究の進展や資料の集成的ためには、年代の基準を統一することの重要性が確認され、ある「基準」を決めて、「統一化」を図ることが提案された。その試案(抽象的な段階であるが)を、研究集会の報告の一部として、第四紀通信で報告した。研究資料の集成方法については、Lisiecki 氏によって開発された統合化プログラム「Match」 「Autocomp」の有効性が紹介された。次年度までには、より具体的な形に整理したテフラの「標準年代試案」を作成して、議論を喚起する段階まで進めたい。

● 古地震・ネオテクトニクス研究委員会

(代表者：藤原 治)

INQUA の Terrestrial Processes, Deposits and History の Focus Area Group “Paleoseismology and Active Tectonics” に対する国内活動の推進を主目的とする。近年社会的に注目されている古地震や古津波の研究についてのアウトリーチや、関連諸分野との連携を深めるため、野外観察会などを開催した。

1) 遠州灘沿岸の古地震・津波痕跡についての野外集会

開催日：2012 年 8 月 13 日(月) 9:30～16:30、案内者：藤原 治会員、吾妻 崇会員(産総研)

参加者：25 名(学生 3 名)、参加費：3000 円(学生 2000 円)

行程：掛川駅—太田川工事露頭(1498 年明応津波堆積物の観察)—掛川市大須賀(1707 年宝永地震による横須賀湊の隆起跡)—御前崎(完新世海岸段丘群および更新世段丘)—掛川駅

2) 深谷断層見学会(活断層学会主催、本委員会は共催)

開催日：2013 年 6 月 9 日(日) 9:30～17:30

案内者：水野清秀会員(産総研)ほか、案内補助 2 名(豊蔵氏、細矢氏)

参加者：21 名(学生 5 名)、参加費：5000 円(学生 3000 円)

行程：深谷駅—瀧宮神社—深谷断層(岡部、根小屋)—平井断層(金井)—櫛挽断層(寄居)—深谷駅

※見学会説明用ポスターを利用して、深谷駅のギャラリーで「深谷断層展」を実施。活断層フォトコンテスト入賞作品を併せて展示。見学者数は 50 名弱。

◆ 教育・アウトリーチ委員会 2012 年度活動報告

(委員長：川村教一、担当幹事：植木岳雪)

2011 年 6 月の地学教育のシンポジウムを契機として、2011 年 8 月に 2 年間をめどとして特別委員会として設置された。今年度は、企画と合同で、熊谷大会での南極との中継、普及活動、11 月の市民向けの巡検・ミニシンポジウムを行った。また、市民向けの普及・啓発活動とジオパークをテーマにして科学研究費補助金(研究成果公開促進費)2 件に応募したが、不採択であった。さらに、学会としてジオパークをどのように支援・協力したらよいか、ジオパークワーキンググループ内で議論を行った。この 2 年間の活動を通して、学校教育の現場やカリキュラム設定、ジオパークをはじめとする生涯学習に、学会が貢献することの重要性があらためて認識された。これらは学会の行事・企画の活動と密接に関係することから、幹事会の行事・企画に本委員会を発展的に取り込んで、今後新しい常設委員会の設置が望まれる。

## ◆国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会 2012 年度活動報告

(委員長：斎藤文紀、事務局長：吾妻 崇)

組織委員会の全体会合を 1 回（5 月 23 日）、幹事会を 6 回（11 月 4 日、1 月 12 日、3 月 2 日、4 月 7 日、5 月 22 日、7 月 25 日）開催し、助成金等の申請、関連学協会への協力依頼、大会プログラム及び予算等の検討を行った。日本学術会議の共同開催国際会議について 11 月に申請書を提出し、書類審査及び面接審査を通過し、3 月 28 日に平成 27 年度共同主催国際会議候補として決定の連絡を受け、必要な書類を 5 月に提出した。日本観光協会（JNTO）の寄附金交付金制度について 11 月に応募し、12 月に採択されることが決定した。同制度を用いて企業・団体等への寄付金の依頼を始めた。関連する学協会に大会開催協力を依頼し、共催 31 団体、後援 5 団体、協賛 3 団体の回答を得た。大会ホームページ（英語版）を開設した（<http://inqua2015.jp>）。日本語版については、現在公開に向けて、内容の確認中である。大会巡検を募集し、プレ・ポスト巡検 22 コース（北海道、房総半島など、海外も含む）、日帰り巡検 14 コース（水月湖、根尾谷断層、富士山など）の提案があった。3 月 2 日に大会会場となる名古屋国際会議場を視察し、会場レイアウトの検討を行った。INQUA と関わりが深い国内研究者に、過去の INQUA 大会の回顧録などを「第四紀通信」に投稿して頂くことを依頼し、20 巻 2 号（2013.4）から掲載が始まっている。

大会開催準備の全体スケジュールについては、発表投稿および参加登録受付開始を 2014 年 7 月とし、口頭発表締切を同年 12 月に、ポスター発表締切を 2015 年 3 月に予定している。巡検参加申込みとホテル予約も登録受付と同時に開始する予定である。これらの登録受付作業については複数社からシステム内容や見積りを尋ねたうえで JTB の登録システムを利用することを決め、システムの構成について JTB 担当者から幹事会で 2 度ヒアリングを行い、準備を行っている。組織委員会報告の第 2 報を第四紀通信 20 巻 4 号（2013.8）に掲載した。

## ◆第 22 期日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会 2012 年度活動報告

(委員長：奥村晃史)

- 1) 2012 年 10 月 20 日に第 22 期・第 2 回分科会を開催した。主要な議事は以下のとおりである。
  - ・INQUA 研究委員会・プロジェクト対応について。Coastal and Marine Process Commission 副委員長に横山祐典、Terrestrial Process Commission 副委員長に吾妻 崇（TERPRO）が選出されたこと、小野 昭と出穂雅実による 2 件の提案が INQUA プロジェクトに採択されたことが報告された。
  - ・国際第四紀学連合第 19 回大会 INQUA への準備状況について。斎藤委員より、参考資料（組織委員会検討資料）にもとづいて、第 19 回国際第四紀学連合大会 2015 への準備状況、大会組織委員会の組織体制、予算案等について説明がなされた。
  - ・2015 年第 19 回 INQUA 大会の学術会議共同主催提案について申請の手続きを確認した。
  - ・日本第四紀学会から提出が予定されている申請書案の記載内容と提出資料内容について検討した。
- 2) 2013 年 1 月 31 日日本学術会議から「地質地盤情報の共有化に向けて -- 安全・安心な社会構築のための地質地盤情報に関する法整備 --」の提言公開
- 3) 2013 年 3 月 22 日日本学術会議幹事会において平成 27 年度共同主催候補（6 大会決定、6 大会保留）が選ばれ、国際第四紀学連合第 19 回大会候補決定。2013 年 5 月 27 日「会議の内容等に関する基礎資料作成」提出。最終決定は開催年の閣議決定による。
- 4) 平成 25 年度代表派遣。第一回国際層序学会（STRATI2013）リスボン、2013 年 7 月 1 日～7 日、奥村晃史。
- 5) 第一回国際層序学会において、中期更新世 GSSP を上総層群国本層（千葉県市原市の養老川）に設定する可能性について研究発表と意見交換を行った。
  - ・イタリアの候補 2 地点とともに最終選考の対象となるためには、英語のレビュー論文、既存大量日本語論文の英訳、英語抄録の作成と刊行（できれば Quaternary International）、堆積・層序に関わる疑義・問題点の解決が、2015 INQUA 名古屋大会までに完了していること。Episodes, に提案論文を掲載すること、等を ICS 第四紀サブコミッション委員長 Martin Head 等から指摘された。
  - ・ICS 第四紀サブコミッションに日本から Voting Member を推薦することを求められた。
  - ・風岡 修（千葉県環境研究センター）を中心に、上記の条件を満たすための準備に着手した。
- 6) INQUA 執行委員会（2013 年 3 月 5 日～9 日、Caracas, Venezuela）
  - ・IFG のプロジェクト等に対して、今年度は 22 件約 106,000 ユーロ採択。
  - ・INQUA のセクレタリージェネラルが VISA の問題で出席できなかった。メール連絡にも問題があるので、改善策が必要。
  - ・膨大な過去の INQUA の資料の電子化をはじめめる。
  - ・SACCOM 委員長の Philip Gibbard が国際層序委員会（ICS）の委員を辞任。後任は Martin Head。執行委員会では前向きな議論はなかった。LISBON 国際層序学大会で第四紀セッション開催。

- ・完新世の細分（前期、中期、後期の境界が 8.2ka, 4.2ka。JQS に提案論文が載っている：Walker et al., Journal of Quaternary Science (2012) 27 (7) 649-659)。
- ・中部更新統基底、上部更新統基底 GSSP の検討。
- ・INQUA の財政状態は引き続き良好。全体で 20 万ユーロ程度。
- ・IFG のプロジェクトに対して、今年度は約 10 万ユーロを支出する予定。
- ・分担金のカテゴリの再編は、各国に変更の提案を行っているが、基準が決まっていない。
- ・INQUA Early Career Researcher Inter-congress Meeting, Wollongong, Australia, December 2nd- 6th 2013.

### ◆日本第四紀学会 2012 年度第 6 回幹事会議事録

日時：2013 年 7 月 28 日（日） 10:00～17:00  
 場所：早稲田大学教育学部 1029 会議室  
 出席者：遠藤、小野、竹村、久保、池原、出穂、岡崎、北村、須貝、長橋、兵頭、水野、奥村（学術会議）、齋藤（次期副会長）、吾妻（次期幹事）、中野（事務局）

#### <報告事項>

- 1) 学会への配布物 3 件。
- 2) 役員選挙の結果、2013～2014 年度の評議員（41 名）と会長・副会長・会計監査・互選幹事が確定した。会長推薦幹事について現在、調整中。
- 3) 研究委員会の 2012 年度報告を行い、2013 年度計画を提示した。
- 4) 前回の幹事会以降の報告事項を含めて 2012 年度の事業報告を弘前大会の大会総会・評議員会資料にまとめた。
- 5) 弘前大会のプログラムを確定し、第四紀通信 4 号に掲載した。
- 6) 第 1 回国際層序学会（2013 年 7 月 1～7 日、リスボン）にて中期更新世 GSSP を上総層群国本

層に設定する可能性について研究発表と意見交換が行われた。

#### <審議事項>

- 1) 国際地学オリンピックに対して協賛金を出すことにした。
- 2) 第四紀研究投稿規定の改訂、特に電子付録掲載要項案について議論し、大会時の評議員会にて提案することにした。
- 3) 2012 年度会計報告（7 月 27 日時点）について確認し、2013 年度予算案について検討した。
- 4) 会員へのサービスを向上させるための検討委員会、選挙制度についての検討委員会をともに 2013 年度に設置することについて議論をし、評議員会で提案することとした。
- 5) INQUA 名古屋大会での記念出版物について検討した。
- 6) 資源エネルギー庁からの放射性廃棄物地層処分に関する WG 委員推薦依頼について、意見交換をし、正式な依頼文書が来てからさらに検討することとした。

### ◆日本第四紀学会 2013 年度第 1 回幹事会（新旧合同）議事録

日時：2013 年 8 月 22 日（木） 12:00～13:45  
 場所：弘前大学教育学部 2 階 202 教室  
 出席：吾妻 崇、植木岳雪、遠藤邦彦、岡崎浩子、奥村晃史、北村晃寿、久保純子、齋藤文紀、須貝俊彦、高田将志、竹村恵二、長橋良隆、水野清秀  
 オブザーバー：小森次郎、藤原 治、米田 穰

#### 審議事項

1. 評議員会と総会の段取りを確認した。
2. 放射性廃棄物地層処分に関する経済産業省、総合資源エネルギー調査会臨時委員の推薦依頼について、新旧会長と新旧幹事長から提案された原案を検討し、これを承認した。回答文については、本学会の立場を明記した文章を水野幹事長が作成し、会長と相談し、提出することとした。

### ◆“東海地震” 防災セミナー 2013[ 第 30 回 ] のお知らせ

昭和 59 年以来、毎年静岡市で開いてきましたが、本年も下記のとおり開催致します。関心をお持ちの方々のご参加を期待します。

日 時：平成 25 年 11 月 7 日（木）13:30～16:00

会 場：静岡商工会議所静岡事務所 5 階ホール（JR 静岡駅北口西側）

テーマ：東海地震対策についての考え方

座 長：神奈川県温泉地学研究所所長 静岡大学名誉教授 里村幹夫

1. 東海地震と南海トラフ巨大地震発生についての最近の研究の動向

東京大学地震研究所 教授 加藤照之

2. 過去の震災に学ぶ南海トラフ巨大地震対策

名古屋大学減災連携研究センター長 教授 福和伸夫

主 催：東海地震防災研究会

連絡先：〒422-8035 静岡市駿河区宮竹 1-9-24 土研究事務所 土 隆一

Tel：054-238-3240 Fax：054-238-3241



## ◆ 2013 年度第 1 回評議員会議事録

日時：2013 年 8 月 22 日（木） 17:55～19:45

場所：弘前大学教育学部 2 階 202 教室

出席者：吾妻 崇、阿部彩子、植木岳雪、海津正倫、岡崎浩子、奥村晃史、北村晃寿、久保純子、斎藤文紀、里口保文、白井正明、須貝俊彦、鈴木毅彦、竹村恵二、陶野郁雄、長橋良隆、中村俊夫、藤原 治、水野清秀、山崎晴雄（以上、評議員）、遠藤邦彦（前会長）、高田将志、兵頭政幸（以上、旧幹事）、小森次郎、米田 穰（以上、新幹事）

高田将志企画幹事（旧幹事、以下同様）の司会で、遠藤邦彦前会長のあいさつ、斎藤文紀副会長のあいさつ（小野会長の代読含む）の後、里口保文評議員を議長に選出した。定足数確認（出席者 20 名、委任状 20 通）後、配布資料に基づき、下記の報告・審議がなされた。

## I 報告事項

## 1. 2012 年度事業報告（2012 年 8 月 1 日～2013 年 7 月 31 日）

各担当幹事より活動報告が行われた。

1-1 庶務（庶務幹事：水野清秀 [庶務]、三田村宗樹 [顕彰]、北村晃寿 [法務]）

1) 会員動向（2013 年 7 月 31 日現在）：正会員 1329 名（うち学生・院生会費会員 82 名、海外会員 10 名を含む）、名誉会員 16 名、賛助会員 10 社。逝去会員：阿部祥人会員（2013 年 1 月 1 日）、沢野 弘会員（2013 年 5 月 9 日）、垣見俊弘会員（2013 年 7 月 1 日）。

2) 総会・評議員会・幹事会の開催：2012 年度第 1 回評議員会を 2012 年 8 月 20 日に立正大学熊谷キャンパスで開催した（出席者 25 名、委任状 13 通。議長：河村善也会員）。2012 年度総会を 2012 年 8 月 21 日に立正大学熊谷キャンパスにおいて開催した（出席正会員 88 名、委任状 135 通、名誉会員 2 名、議長：海津正倫会員）。2012 年度第 2 回評議員会を 2013 年 3 月 3 日に名古屋大学環境総合館において開催した（出席評議員 14 名、委任状 24 通、議長：海津正倫会員）。2012 年度第 3 回評議員会を 2013 年 5 月 23 日に幕張メッセ国際会議場で開催した（出席評議員 19 名、委任状 18 通、議長：三浦英樹会員）。幹事会を 6 回開催した。

3) 2013 年日本第四紀学会賞および学術賞の選考を行った。

4) 2013 年日本第四紀学会論文賞および奨励賞の選考を行った。

5) 2013～2014 年度評議員と役員の実施した。

6) 日本第四紀学会功労賞の選考については、2014 年名誉会員候補者の選考とタイミングを合わせ、2014 年に持ち越すこととした。

7) 2012 年度会費の減免申請（1 件）に対して承認した。

8) 転載許可の承認（8 件）を行った。また、日本第四紀学会が使用している故園山俊二氏の漫画について転載許可申請があったが、日本第四紀学会が関係する行事以外では許可しないことにした。さらに日本第四紀学会大会講演要旨集の発行日以前の事前引用は認めないこととした。

9) 寄贈図書等の受付、整理を行った。

10) 学会・シンポジウム等の共催・後援等を行った：埼玉県立川の博物館・自然の博物館「彩の国さいたまの自然を楽しむ野外見学会とミニ講演会」（共催：2012 年 11 月 10・11 日）、3rd APLED 特別講演会（協賛：岡山理科大学、2012 年 11 月 18 日）、第 22 回環境地質学シンポジウム（共催：産業技術総合研究所、2012 年 12 月 7・8 日）、日本地質学会関東支部「銚子巡検」（後援：2012 年 12 月 7・8 日）、富士学会 2013 年度春季学術大会（後援：富士宮市、2013 年 6 月 1・2 日）、日本活断層学会「深谷断層見学会」（共催：2013 年 6 月 9 日）、第 57 回粘土科学討論会（共催：高知市、2013 年 9 月 4～6 日）、2<sup>nd</sup> ASQUA Conference（後援：Ulan-Ude-Baikal、ロシア、2013 年 9 月 9～15 日）、日本地質学会第 120 回学術大会（仙台）巡検（協賛：2013 年 9 月 13・14・17・18 日）、第 10 回環境地盤工学シンポジウム（後援：日本大学、2013 年 9 月 17・18 日）、三重県総合博物館シンポジウム「新第三紀の終焉と第四紀の始まりー東海層群から読み解く気候変動ー」（共催：2013 年 11 月 10 日）。

11) 原子力規制委員会から原発敷地内破碎帯等の現地調査団員候補者の推薦依頼があり、幹事会で被推薦者名簿を作成し、提出した。

1-2 行事・企画（行事幹事：出穂雅実、企画幹事：植木岳雪、高田将志）

1) 日本第四紀学会 2012 年大会「熱い討論 第四紀学会 2012 年大会 in 立正大熊谷（立正大学開校 140 周年記念）」を、8 月 20 日（月）～8 月 22 日（水）の 3 日間にわたって、立正大学熊谷キャンパス（埼玉県熊谷市）において開催した。この大会では、発表を複数のセッションで行うことを試み、従来のような第四紀のさまざまなテーマを扱う「一般セッション」と、熊谷大会で設定した「テフラと年代測定」に関連する「テーマセッション」（日本火山学会、日本鉱物科学会、日本地形学連合、日本地質学会と共催）が、20 日と 21 日の 2 日間にわたってすすめられた。一般セッションは口頭 21 件、ポスター 36 件、テーマセッションは 5 つのサブセッションに分けられ、口頭 52 件、ポスター 12 件の発表があった。また、22 日は国立極地研究所の協力により、公開シンポジウム「氷床コア等から得られる第四紀環境情報」および市民・児童生徒向けの普及活動（展示・質問コーナー・南極との

- 中継)が行われた。大会参加者数は、20・21日の研究発表では、会員172名、共催学会会員12名、非会員87名の合計271名、22日の公開シンポジウム・普及活動の参加者は、会員36名、一般(大人)104名、高校生0名、中学生2名、小学生10名、幼児3名の合計155名であった。一般セッションおよびテーマセッションでは、昨年に引き続き若手・学生会員を対象とした発表賞を企画した。20日夜に評議員会、21日午前に総会を開催し、21日夕方には懇親会が開催された(参加者:約100名)。8月23日は「荒川上・中流域の第四紀」のバス巡検が実施され25名が参加した。このほか、大会と平行して7月14日(土)～9月2日(日)まで、埼玉県立川の博物館(埼玉県寄居町)では日本第四紀学会後援の特別展「今だって氷河時代―埼玉からさぐる気候変動―」が開催され、8月19日に関連講演会(日本第四紀学会共催)として、福井幸太郎会員(立山カルデラ砂防博物館)による講演会「現存する日本の氷河 北アルプス立山連峰」が行われた。
- 2) 2012年11月10日(土)、11日(日)に、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)によるアウトリーチ活動「彩の国さいたまで自然の歴史を発見しよう」を、埼玉県立川の博物館、自然の博物館と共催で開催した。10日(土)の野外観察会の一般参加者は11名、11日(日)の埼玉県立川の博物館におけるミニ講演会の一般参加者は約60名であった。
  - 3) 2012年11月18日(日)に岡山理科大学50周年記念会館において、3rd APLED (Asia Pacific Conference on Luminescence and Electron Spin Resonance dating - including non-dating applications of Luminescence and ESR) 特別講演会を共催した。当日は、「Quaternary Geochronology reveals close relations between climate and sea level」の演題で、日本第四紀学会会員の横山祐典(東京大学)氏による講演が行われた。参加者は約40名であった。
  - 4) 2012年度学会賞受賞者講演会を2013年3月3日に名古屋大学環境総合館レクチャーホールにおいて開催し、学会賞受賞者2名(中村俊夫会員、河村善也会員)による講演が行われた。参加者は合計で約40名であった。
  - 5) 2013年4月20日(土)～21日(日)に日本第四紀学会巡検「古環境変遷と千代川流域流砂系からみる鳥取砂丘の成り立ち」を開催した。案内者の小玉芳敬会員(鳥取大)・田村 亨会員(産総研)を含め、参加者17名であった。
  - 6) 2011・2012年度学会賞受賞者講演会を兼ねて、2013年6月22日(土)に大阪大学大学院理学研究科において特別講演会を開催し、学会賞受賞者3名(成瀬敏郎会員、兵頭政幸会員、寒川 旭会員)と招待講演者(都司嘉宣氏)による講演が行われた。参加者は合計

で約40名であった。

- 7) 日本第四紀学会2013年大会の準備を行った。大会は弘前大学教育学部を中心として、8月22日(木)に一般セッション・評議員会、23日(金)に一般セッション・総会・懇親会、24日(土)に公開シンポジウム、25日(日)に巡検を行う予定で準備が進められている。実行委員会は、弘前大学のスタッフを中心とする会員である。
  - 8) 日本第四紀学会2014年大会開催地について検討を行った。2014年9月(候補;9月6日(土)～8日(月))に東京大学柏キャンパスにおいて大会を実施することで調整中である。
- 1-3 編集(編集幹事:長橋良隆・岡崎浩子)
- 1) 第四紀研究第51巻第5号(総説1編、書評3編、19頁)、第6号(論説1編、15頁)を刊行した。第51巻の総頁数は332頁である(第50巻:330頁)。第52巻第1号(論説1編、短報1編、32頁)、第2号(論説1編、短報1編、20頁)、第3号(前田会員学術賞受賞記念論文、短報1編、ベルン大会報告雑録1編、42頁)、第4号(立正大学大会のテーマセッション特集号、6編、95頁)を刊行した。
  - 2) 日本第四紀学会賞および学術賞受賞者に受賞記念論文を依頼し、2011年学術賞記念論文を第52巻第3号に掲載し、第5号に掲載予定である。2012年学会賞・学術賞受賞者には原稿を依頼済みである。
  - 3) 編集委員会は5回(2012年9月29日、12月8日、2013年2月2日、4月6日、7月27日)開催した。8月9日現在、受理済み原稿は4編(52-5掲載予定)、手持ち原稿は総説1編、論説8編、短報1編、講座7編である。なお、特集号・雑録・書評を除く投稿数は、2012年は22編、2011年は25編、2010年は21編であった。
  - 4) 編集委員会規定(案)、投稿規定の一部改正(案)、電子付録掲載要項(案)について検討した。編集委員会規定(案)は3月3日の評議員会で承認され、第四紀通信20巻2号に掲載した。また、受理後に提出する電子データの形式についてのお知らせを第四紀通信20巻3号に掲載した。
  - 5) 編集状況や問題点は「編集委員会だより」を通じて、会員に知らせるように努めた。原稿の投稿を「編集委員会だより」にて呼びかけた。また、2012年立正大学大会では編集委員会ブースを出し、編集活動の広報と投稿の促進を呼びかけた。
  - 6) J-STAGEによる電子ジャーナル化を行っており、現在のところ51巻3号までの公開と52巻1号までアップロードが完了している。最新号から過去1年間の論文の会員認証を無くしたので(2012年度第3回評議員会)、アップロードと点検が終われば、会員外を含め、閲覧・ダウンロードが可能となる。
- 1-4 広報(広報幹事:兵頭政幸)
- 1) 「第四紀通信(QR News Letter)」Vol.19

- No.5 (2012年10月)、同No.6 (2012年12月)、Vol.20 No.1 (2013年2月)、同No.2 (2013年4月)、同No.3 (2013年6月) および同No.4 (2013年8月) を刊行した。
- 2) 「第四紀通信」上記各号の電子版(pdf形式)を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。
  - 3) 日本第四紀学会ホームページを通じて各種の広報・普及活動を行った。主なものは、「第四紀通信電子版」の掲載のほか、①本学会2013年大会の情報提供、②本学会主催行事(シンポジウム、講演会等)の情報提供、③「第四紀研究」の目次掲載、④地球惑星科学連合大会の情報提供、⑤各種公募・助成情報の掲載、⑥他学会等による各種イベント情報等の提供、⑦だいよんきQ & Aを通した第四紀学の普及活動、⑧国際第四紀学会第19回大会組織委員会作成の公式ホームページ(英語)と日本語ホームページへのリンクを通したINQUA名古屋大会の情報提供、である。
  - 4) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じ、大会、講演会、シンポジウム、研究集会、公募・助成等の連絡や情報提供を行った。
  - 5) 日本第四紀学会幹事会メーリングリストの管理を行った。
  - 6) 日本第四紀学会評議員会メーリングリストの管理を行った。
- 1-5 渉外(渉外幹事:須貝俊彦)
- 1) 公益社団法人日本地球惑星科学連合:2013年大会が2013年5月19日~24日に幕張メッセで開催され、43件の国際セッションを含む180件のセッション(前年比+3)が開催され、3,980件の発表(同+104)と、6,824名の参加(同-424;2011年比では+1,015)があった。第四紀関係のセッションは毎年充実:第四紀学会単独開催セッション『ヒト-環境系の時系列ダイナミクス』(Oral:18+Poster:18)、共催『平野地域の第四紀層序と地質構造』(O:11+P:7)(以上、HQR第四紀セッション)、主催『活断層・古地震』(O:17+P:33)、共催『津波堆積物』(O:18+P:17)、共催『人間環境と災害リスク』(O:11+P:6)、共催『ジオパーク』(O:10+P:16)、『氷床・氷河コア』(O:13+P:6)、『古気候・古海洋』(O:37+P:28)はじめ、多数のセッションが開催された。各サイエンスセクションで、学生優秀発表賞を決定。学生賞制度の統一基準作りに向けて5つのサイエンスセクションで共同検討中。川幡穂高会員他「8世紀の奈良平城京における重金属汚染」が地球人間圏セクションハイライトに選出。地球惑星科学連合2014年大会プログラム委員長は日代会員が就任予定。第四紀学会プログラム委員2名:宮内崇裕・吾妻 崇両新渉外幹事を推薦。今後のスケジュール:セッションの提案(9月2日~)>提案セッションの採択(11月予定)>大会プログラム編成案の検討(2~3月予定)。パシフィック横浜4月28日~5月2日(2015年は再び幕張)。

新ジャーナルについて:新たに刊行する新ジャーナルの編集・運営委員会に学会から委員を出すようにとの要請があり、幹事会で検討し、池原 研会員を委員として推薦した。連合の新ジャーナルは、'Progress in Earth and Planetary Science'の名称のオープンアクセスジャーナルとして、2014年1月刊行の予定である。

- 2) 自然史学会連合2012年度総会、2012年12月22(土)東京大学総合研究博物館。続いて中高一般向け自然史読み物の企画会議開催(須貝出席)。学会から編集委員を出すように要請があり、幹事会で検討し、植木会員を委員として推薦した。2013年3月17日学研にて編集委員会開催。
- 3) PAGES関係、第2回Meetingが2月にインドのゴアで開催された。横山会員、久保会員ほか参加。

## 2.2012年度決算報告・会計監査報告

(本号資料1「2012年度収支決算報告」、資料2「貸借対照表」、資料3「2012年度会計監査報告」、資料5「2012年度業務委託費」参照)

水野庶務幹事より配布資料に基づき説明があった。続いて鈴木毅彦会計監査より、2012年度の会計が適正に運用されていたことを確認した旨、報告された。

## 3.学会賞・学術賞受賞者選考報告

水野庶務幹事より、2013年5月23日に行われた評議員会にて、学会賞・学術賞の受賞者が決定したことが簡単に報告された(本号「学会賞・学術賞受賞者選考報告」参照)。

## 4.論文賞・奨励賞受賞者選考報告

水野庶務幹事より、2013年5月23日に行われた評議員会にて、論文賞・奨励賞の受賞者が決定したことが簡単に報告された(本号「論文賞・奨励賞受賞者選考報告」参照)。

## 5.評議員・役員選挙報告(選挙管理委員会委員長:中島 礼、幹事会)

水野庶務幹事より、選挙結果と以下の選挙管理委員会報告が行われた。

2013~2014年度評議員・役員選挙の運営を以下のように行なった。委員会は幹事会より推薦された、中島 礼、石村大輔、齋藤めぐみ、谷川晃一朗、千葉 崇、吉田英嗣の各委員で構成され、互選により中島委員が委員長に就任した。

評議員選挙は全会員を有権者にして投票が行なわれ、2013年5月25日の開票で、41名の評議員が選出された。次いで新評議員を有権者とした役員選挙が行なわれ、6月22日の開票で役員が選出された。互選幹事は1名の辞退者がでたため、次点者を繰り上げた(各役員の名簿は本号「2013~2014年度役員名簿」参照)。

評議員選挙では、メーリングリストで3回の投票呼びかけを行ない、投票率は16.7%となった。

前回、前々回の投票率は共に 17.7% で、今回は投票率が下がった結果となった。今後も選挙の呼びかけと投票の煩雑さの軽減などの投票しやすい環境を整える努力をしていくべきである。

評議員選挙の投票率が低い要因の一つとして、投票方法の煩雑さが挙げられ、抜本的な投票方式の改革が求められる。また、「共通分野」の意義が分かりにくく、本来の狙い通りに機能しているか疑問が残る。共通分野で地質や地理の評議員数が増え、その結果として、規模の小さな専門分野の意見が埋没することはないか議論すべきである。

以上について、役員選挙規定の改訂も含め幹事会及び評議員会で検討する必要がある。

## 6. 研究委員会報告

4つの研究委員会について、活動報告が行われた(本号の「研究委員会 2012 年度活動報告」参照)。

## 7. 教育・アウトリーチ委員会報告

植木企画幹事より、活動報告が行われた(本号「教育・アウトリーチ委員会 2012 年度活動報告」参照)。

## 8. 国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会報告

組織委員会委員長の斎藤文紀会員より、報告が行われた(本号「国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会 2012 年度活動報告」参照)。

## 9. 第 22 期日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会報告

分科会委員長の奥村晃史会員より、報告が行われた(本号「第 22 期日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会 2012 年度活動報告」参照)。

## 10. その他

以下の 3 点について、久保純子幹事長より報告が行われた。

- 1) 放射性廃棄物地層処分に関する経済産業省、総合資源エネルギー調査会臨時委員の推薦依頼について、会長から遠藤邦彦前会長を推薦することを幹事会として決定したことが報告され、評議員会の承認を得た。
- 2) 地質・地盤情報活用促進に関する法整備推進協議会へ第四紀学会も参加し、活動することとした。
- 3) 「デジタルブック最新第四紀学」について一部修正・追加した第 2 刷が完成し、会員には交換・販売とし、一般販売も開始される。

## II 審議事項

### 1.2013 年度事業計画 (2013 年 8 月 1 日～2014 年 7 月 31 日)

久保幹事長より、下記のような事業計画案が示され、承認された。

#### 1-1 庶務

- 1) 総会・評議員会・幹事会を開催する。
- 2) 会員名簿の管理を行う。

3) 学会賞・学術賞受賞者選考および論文賞・奨励賞受賞者選考に関する業務を行う。

4) 名誉会員選考及び功労賞選考に関する業務を行う。

5) 転載許可・受け入れ図書 of 整理を行う。

6) 学会・シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行う。

7) 日本学術振興会賞などの賞への学会推薦を行う。

8) その他学会活動に関する庶務業務を行う。

#### 1-2 会計

会計に関する業務を行う。

#### 1-3 行事・企画

1) 2013 年 8 月 22 日～24 日に弘前大学教育学部を主な会場として、日本第四紀学会 2013 年大会を実施する。

2) 2013 年度学会賞・学術賞受賞者講演会を実施する。

3) 日本第四紀学会 2014 年大会を 2014 年 9 月に東京大学柏キャンパスで開催するため、関係者で検討し、その準備を行う。また、2015 年大会の準備を行う。

4) 2014 年 7 月までの期間に実施する講習会またはアウトリーチ巡検などの企画を検討する。

5) 地学教育、ジオパーク、地学情報などに関する外部機関との連携を進める。

#### 1-4 編集

1) 2013～2014 年の編集委員会を組織し、第四紀研究の編集にあたる。

2) 「第四紀研究」第 52 巻 5 号、6 号、第 53 巻 1 号、2 号、3 号、4 号を編集し、定期刊行する。また、J-STAGE を通じて、電子ジャーナルとしての刊行を行う。

3) 2013 年大会特集号編集委員会を設置し、編集などにあたる。

4) 「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。

#### 1-5 広報

1) 広報委員会を組織して、第四紀通信の編集およびホームページの維持管理を行う。

2) 「第四紀通信 (QR News Letter)」Vol.20 No.5 (2013 年 10 月)、同 No.6 (2013 年 12 月)、Vol.21 No.1 (2014 年 2 月)、同 No.2 (2014 年 4 月)、同 No.3 (2014 年 6 月) および同 No.4 (2014 年 8 月) を発行する。

3) 「第四紀通信」上記各号の電子版 (pdf 版) を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載する。各ファイルを保存し、アーカイブ化を継続する。

4) 日本第四紀学会ホームページを通じて広報、情報提供、アウトリーチ活動等を行う。

5) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて各種情報提供等を行う。

6) 日本第四紀学会評議員会メーリングリストおよび日本第四紀学会幹事会メーリングリストの管理を行う。

7) 2015 年 INQUA 名古屋大会のホームページ

と連携して日本第四紀学会ホームページ英語版の充実を図る。

#### 1-6 渉外

日本地球惑星科学連合をはじめ、自然史学会連合等国内関連学協会との連携を高めていく。とくに地球惑星科学連合における日本第四紀学会の認知度と活動度を高めるために、連合大会セッションについて、『ヒト-環境系の時系列ダイナミクス』と、『活断層と古地震』ならびに『平野地質-第四紀層序と地質構造-』を第四紀学会が開催し、第四紀学会員の発表の場を用意するとともに、ジオパークをはじめ第四紀学に関連するセッションとの連携・共催を積極的にすすめる（セッション提案期間は9月2日～10月下旬頃）。

#### 1-7 国際第四紀学連合第19回大会準備

国際第四紀学連合第19回大会組織委員会を中心に、2015年7月27日～8月2日に名古屋で開催予定の第19回INQUA大会の準備を進める。

### 2.2013年度予算案

水野庶務幹事より、2013年度予算案の説明が行われ、承認された（資料4）。

### 3. 会長推薦幹事の承認

2013～2014年度会長推薦幹事として下記5名が承認された：卜部厚志、小森次郎、齋藤めぐみ、藤原 治、米田 穰、各会員

### 4. 電子付録掲載要項案及びそれに伴う投稿規定、編集委員会規定の一部改訂

長橋編集幹事より、第四紀研究掲載論文の電子付録を日本第四紀学会ホームページに掲載することができる提案を行うとともに、それに伴う、第四紀研究投稿規定の一部改訂、電子付録掲載要項、編集委員会規定の一部改訂の提案がなされ、一部修正のうえ承認された（本号「第四紀研究で電子付録が利用可能になります」参照）。

### 5. 常設委員会「行事・企画委員会」の設置

久保幹事長より下記委員会の設置提案が行われ、承認された。

行事・企画幹事のもとにあらたに常設委員会「行事・企画委員会」を設置する提案を行う。特別委員会「教育・アウトリーチ委員会」の活動内容を引き継ぎ、地学教育、ジオパークなどに関する検討や活動を行うほか、シンポジウム、普及講演会・講習会・巡検などの計画・立案、外部の関係機関と連携した活動などを進める。委員は、「教育・アウトリーチ委員会」の構成委員を中心に若干名を追加する。

### 6. 特別委員会設置

久保幹事長より下記2つの委員会設置提案が行

われ、承認された。

#### 6-1. 「選挙制度検討委員会」

2013年6月に実施された2013～2014年度評議員選挙、ならびにそれ以前の近年の評議員選挙において選挙管理委員会からの報告・提言にもとづき、下記項目を検討する委員会を設置し、2013年度内に会長あて答申を依頼したい。

名称：選挙制度検討委員会

設置期間：2013年度

委員構成：幹事会の推薦する会員5名程度

検討依頼事項：

- 1) 分野別会員数と評議員定数の検討、とくに会員数20名以下の分野の評議員数の検討。
- 2) 現行選挙制度の検討。投票率を上げるための方策、会長・副会長の選出方法、推薦または立候補制の可否、等。

背景：

近年の評議員選挙の投票率は17～18%と低く、これは選挙方法が煩雑なためとの指摘がある。一方で、日本第四紀学会の特色として、分野ごとに代表を選出することや、少数分野の意見を埋没させないように配慮してきたことなどがある。

#### 6-2. 「会員サービス向上検討委員会」

下記項目を検討する委員会を設置し、2013年度内に会長あて答申を依頼したい。

名称：会員サービス向上検討委員会

設置期間：2013年度

委員構成：幹事会の推薦する会員5名程度

検討依頼事項：

- 1) 会員を増やすための方策。
- 2) 大会や会誌充実のための方策。
- 3) 日本第四紀学会会員であることのメリットをアピールする方策。

背景：

会員数の減少が続くなかで、「第四紀研究」のJ-Stageフリーアクセス化や「第四紀通信」のウェブサイト公開により、雑誌購読以外のメリットを充実させる必要がある。

### 7. 法務委員会常任委員の承認

法務委員会常任委員の任期満了に伴い、あらたに2013年8月1日～2015年7月31日までの期間の法務委員会常任委員を下記5名の正会員とすることが承認された。

諏訪 順（再任）、渡邊真紀子（再任）、公文富士夫（新任）、高田将志（新任）、百原 新（新任）

### 8. 会費長期滞納者の除籍処分について

4年以上会費を滞納している会員を除籍処分とすることについて、承認された。

## 資料1 2012年度収支決算報告書 (2012年8月1日～2013年7月31日)

収入の部				(単位:円)
科 目	予 算 額 ①	決 算 額 ②	決 算 ② - 予 算 ①	摘 要
会費収入	11,111,000	11,868,680	757,680	
正会員会費収入	10,851,000	11,608,680	757,680	通常会員会費 11,160,000円 学生会員会費 335,000円 海外会員会費 113,680円
賛助会員会費収入	260,000	260,000	0	20,000円×10社(13口)
誌代	1,800,000	1,595,624	-204,376	要旨集売上(420,000円)、定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過頁代収入	700,000	160,823	-539,177	51巻4号～52巻3号別刷代
雑収入	200,000	290,942	90,942	2012年大会余剰金(190,000円)、JST、著作権料収入等
利子収入	5,000	4,633	-367	普通預金利息
広告料収入	70,000	70,000	0	会員名簿広告料
役員選挙積立金取崩収入	350,000	350,000	0	
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0	
名簿作成積立金取崩収入	0	0	0	
予備費積立金取崩収入	0	0	0	
収入合計	14,236,000	14,340,702	104,702	
前期繰越金	8,495,886	8,495,886	0	
合計	22,731,886	22,836,588	104,702	

支出の部				(単位:円)
科 目	予 算 額 ①	決 算 額 ②	予 算 ① - 決 算 ②	摘 要
会誌発行費	6,600,000	4,792,598	1,807,402	
印刷費	3,000,000	2,143,680	856,320	51巻4号～52巻3号 各1,600部
編集費	1,500,000	875,197	624,803	
編集人件費	1,600,000	1,650,000	-50,000	編集書記手当(原田様120万円、綿引様45万円)
別刷印刷費	500,000	123,721	376,279	第四紀研究 51巻4号～52巻3号
会誌・会報発送費	700,000	543,328	156,672	第四紀研究 51巻4号～52巻3号
会報発行費	810,000	650,613	159,387	
印刷費	600,000	503,475	96,525	第四紀通信 19巻4号～20巻3号 各1,500部
編集費	10,000	1,338	8,662	第四紀通信編集費
編集人件費	200,000	145,800	54,200	第四紀通信編集アルバイト代
大会運営準備金	400,000	400,000	0	2013弘前大会
巡検準備金	100,000	100,000	0	2013弘前大会
講演会・シンポジウム費	150,000	105,600	44,400	
予稿集印刷費	300,000	320,040	-20,040	2012年大会講演要旨集(本400部)
学会賞等顕彰費	100,000	95,530	4,470	副賞1名(50,000円)、賞状作成費
講習会費	50,000	0	50,000	
通信費	300,000	289,230	10,770	会費請求書発送郵税、事務通信費等
会議費	100,000	32,000	68,000	
旅費・交通費	500,000	484,470	15,530	幹事会・委員会等交通費
印刷費	350,000	298,708	51,292	学会専用封筒、総会資料印刷、コピー代
業務委託費	2,267,160	2,238,888	28,272	事務委託費概算払分
デジタルブック最新第四紀学CD出版費	800,000	333,000	467,000	改訂編集作業アルバイト代
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	700,000	632,387	67,613	
名簿作成費	0	0	0	
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0	
役員選挙費積立金繰入支出	0	0	0	
名簿作成積立金繰入支出	300,000	300,000	0	
予備費積立金繰入支出	500,000	500,000	0	
研究委員会助成金支出	210,000	43,254	166,746	
加盟学協会分担金支出	30,000	30,000	0	
雑費	100,000	74,977	25,023	振込手数料等
予備費	200,000	0	200,000	
支出合計	15,567,160	12,264,623	3,302,537	
次期繰越金	7,164,726	10,571,965	-3,407,239	
合計	22,731,886	22,836,588	-104,702	

## 資料 2 貸借対照表および財産目録

貸借対照表  
(2013年7月31日現在)

(単位:円)

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産	10,297,705	流 動 負 債	425,740
小 口 現 金	979,234	未 払 金	40,740
現 金 (事務局)	3,305	前 受 会 費	335,000
郵 便 振 替	5,409,990	仮 受 金	50,000
普 通 預 金	3,875,176	正 味 財 産	19,871,965
未 収 金	30,000	名 簿 作 成 積 立 金	300,000
固 定 資 産	10,000,000	INQUA 対 策 積 立 金	0
定 期 預 金	10,000,000	役 員 選 挙 費 積 立 金	0
		予 備 費 積 立 金	9,000,000
		次 期 繰 越 金	10,571,965
		(前期繰越金)	8,495,886
		(当期収支差額)	2,076,079
合 計	20,297,705	合 計	20,297,705

財 産 目 録  
(2013年7月31日現在)

(単位:円)

資 産 の 部		金 額
科 目	摘 要	金 額
小 口 現 金	編集書記手許金	979,234
現 金	事務局手許金	3,305
郵 便 振 替	年会費振込専用口座	5,409,990
普 通 預 金	みずほ銀行早稲田支店	3,676,054
普 通 預 金	三井住友信託銀行本店営業部	199,122
未 収 金	広告料 (2007年)	30,000
流 動 資 産 合 計		10,297,705
定 期 預 金	三井住友信託銀行本店営業部	10,000,000
固 定 資 産 合 計		10,000,000
合 計		20,297,705

## 負 債 の 部 (単位:円)

科 目	摘 要	金 額
未 払 金	シンポジウムアルバイト代、学術賞受賞者交通費 (2013年6月)	40,740
前 受 会 費	2013年度以降年会費	335,000
仮 受 金	INQUAへの寄付金	50,000
合 計		425,740

## 正 味 財 産 の 部 (単位:円)

科 目	摘 要	金 額
名 簿 作 成 積 立 金	名簿作成積立金	300,000
INQUA 対 策 積 立 金	INQUA対策積立金	0
役 員 選 挙 費 積 立 金	役員選挙費積立金	0
予 備 費 積 立 金	予備費積立金	9,000,000
次 期 繰 越 金		10,571,965
	前期繰越金	8,495,886
	当期収支差額	2,076,079
合 計		19,871,965

日本第四紀学会

会長 小野 昭 殿

### 2012年度会計監査報告書

2013年8月20日(火)、千葉大学園芸学部 会議室において日本第四紀学会2012年度収支決算報告書(2012年8月1日～2013年7月31日)の監査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理等、正常適正に処理されていることを確認いたしました。

ここにご報告いたします。

以上

2013年8月20日(火)

会計監査 百原 新 

会計監査 鈴木 毅彦 



## 資料4 2013年度予算案 (2013年8月1日～2014年7月31日)

取 入 の 部				(単位：円)
科 目	2012年予算額	2012年決算額	2013年予算案	摘 要
会費収入	11,111,000	11,868,680	10,820,000	
正会員会費収入	10,851,000	11,608,680	10,560,000	9,000円×1,250名×90%+(学生5,000円×70名×90%)+(海外会員150,000円×80%)
賛助会員会費収入	260,000	260,000	260,000	20,000円×10社(13口)
誌代	1,800,000	1,595,624	1,800,000	Back No., 定期雑誌仕入, 予稿集売上等
別刷・超過頁代収入	700,000	160,823	400,000	
雑収入	200,000	290,942	700,000	JST、著作権料収入、デジタルブック収入等
利子収入	5,000	4,633	5,000	
広告料収入	70,000	70,000	70,000	
役員選挙積立金取崩収入	350,000	350,000	0	
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0	
名簿作成積立金取崩収入	0	0	0	
予備費積立金取崩収入	0	0	0	
収入合計	14,236,000	14,340,702	13,795,000	
前期繰越金	8,495,886	8,495,886	10,571,965	※13年度前期繰越金は12年度予算より計上
合計	22,731,886	22,836,588	24,366,965	

支 出 の 部				(単位：円)
科 目	2012年予算額	2012年決算額	2013年予算案	摘 要
会誌発行費	6,600,000	4,792,598	6,000,000	第四紀研究 52巻4号～53巻3号 計6号
会誌印刷費	3,000,000	2,143,680	3,000,000	
会誌編集費	1,500,000	875,197	1,500,000	
会誌編集人件費	1,600,000	1,650,000	1,200,000	編集書記手当
会誌別刷印刷費	500,000	123,721	300,000	
会誌・会報発送費	700,000	543,328	700,000	第四紀研究 52巻4号～53巻3号 計6号
会報発行費	810,000	650,613	810,000	第四紀通信 20巻4号～21巻3号 計6号
会報印刷費	600,000	503,475	600,000	第四紀通信印刷費
会報編集費	10,000	1,338	10,000	第四紀通信編集費
会報編集人件費	200,000	145,800	200,000	第四紀通信編集アルバイト代
大会運営準備金	400,000	400,000	400,000	2014年大会用
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	2014年大会用
講演会・シンポジウム	150,000	105,600	100,000	
予稿集印刷費	300,000	320,040	300,000	2013年大会講演要旨集
学会賞等顕彰費	100,000	95,530	150,000	副賞2名(100,000円)、賞状作成費
講習会費	50,000	0	50,000	
通信費	300,000	289,230	300,000	会費請求書発送郵税、事務通信費等
会議費	100,000	32,000	100,000	評議員会会議費等
旅費・交通費	500,000	484,470	500,000	幹事会等交通費
印刷費	350,000	298,708	350,000	学会専用封筒、総会資料印刷、コピー代金
業務委託費	2,267,160	2,238,888	2,267,160	
デジタルブック最新第四紀学CD出版費	800,000	333,000	550,000	DVD製作費(700枚)
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	700,000	632,387	0	
名簿作成費	0	0	0	
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0	
役員選挙費積立金繰入支出	0	0	350,000	
名簿作成積立金繰入支出	300,000	300,000	300,000	
予備費積立金繰入支出	500,000	500,000	500,000	
研究委員会助成金支出	210,000	43,254	200,000	4委員会
加盟学協会分担金支出	30,000	30,000	30,000	地球惑星科学連合、自然史学会連合分担金
国際科学技術コンテスト協賛金支出	0	0	100,000	地学オリンピック等
雑費	100,000	74,977	100,000	振込手数料等
予備費	200,000	0	200,000	
支出合計	15,567,160	12,264,623	14,457,160	
次期繰越金	7,164,726	10,571,965	9,909,805	
合計	22,731,886	22,836,588	24,366,965	

資料 5 2012 年度業務委託費及び 2013 年度業務委託費見積

**2012年度業務委託費  
(2012年8月1日～2013年7月31日)**

I. 会員業務費用	<u>1,233,475</u>
1. 会員管理費	975,100 ( 1,393件× 700円)
2. 特別請求書発行手数料 (海外会員) (賛助会員)	18,000 ( 15件× 1,200円) 10,000 ( 10件× 1,000円)
3. 学会誌発送用ラベル作成・貼付・納品	199,175 ( 計 7,967件× 25円)
学会誌発送用ラベル出力手数料	6,000 ( 計 6回× 1,000円)
4. 学会誌保管費用	25,200 ( 7箱× 3,600円)
II. 受付業務費用	<u>360,000</u> (@30,000円/月)
III. 会計業務費用	<u>430,000</u> ※年間
IV. 庶務業務費用	<u>32,000</u> ※事務局幹事会出席費用
V. その他	<u>76,800</u> ※別刷請求手数料他 ※メーリングリスト費用
消費税負担額 5%	<u>106,613</u>
合 計	<u>2,238,888</u>

**2013年度業務委託費見積  
(2013年8月1日～2014年7月31日)**

I. 会員業務費用	<u>1,239,200</u>
1. 会員管理費	980,000 ( 1,400件× 700円)
2. 特別請求書発行手数料 (海外会員) (賛助会員)	18,000 ( 15件× 1,200円) 10,000 ( 10件× 1,000円)
3. 学会誌発送用ラベル作成・貼付・納品	200,000 ( 計 8000件× 25円)
学会誌発送用ラベル出力手数料	6,000 (計 6回× 1,000円)
4. 学会誌保管費用	25,200 ( 7箱× 3,600円/年)
II. 受付業務費用	<u>360,000</u> (@30,000円/月)
III. 会計業務費用	<u>430,000</u> ※年間
IV. 庶務業務費用	<u>30,000</u> ※事務局幹事会・評議員会出席費用
V. その他	<u>100,000</u> ※別刷請求手数料他 ※メーリングリスト費用
消費税負担額 5%	<u>107,960</u>
合 計	<u>2,267,160</u>

## 資料6 日本第四紀学会 2012 年度行事リスト

年	月日	会場	行事種別	主催	共催	テーマ
2012	8月20日 (月)	立正大学 熊谷キャンパス	第1回 評議員会			
	8月20日 (月)・21日 (火)	立正大学 熊谷キャンパス	一般セッ ション発表		立正大学	
	8月20日 (月)・21日 (火)	立正大学 熊谷キャンパス	テーマセ ッション 発表	日本第四 紀学会	立正大学 日本火山学会, 日本鉱物科学 会, 日本地形学 連合, 日本地質 学会	テフラと年代測定
	8月21日 (火)	立正大学 熊谷キャンパス	総会			
	8月22日 (水)	立正大学 熊谷キャンパス	公開シン ポジウム	日本第四 紀学会	立正大学 協力: 国立極地 研究所	氷床コア等から得られ る第四紀環境情報
	8月22日 (水)	立正大学 熊谷キャンパス	普及活動	日本第四 紀学会	立正大学	展示・質問コーナー・ 南極との中継
	8月23日 (木)		巡検	日本第四 紀学会	立正大学	荒川上・中流域の第四 紀
	7月14日 (土)～9 月2日(日)	埼玉県立川 の博物館	特別展	埼玉県立 川の博物 館	日本第四紀学会	今だって氷河時代ー埼 玉から気候変動
	8月19日 (日)	埼玉県立川 の博物館	講演会	埼玉県立 博物館	日本第四紀学会	「現存する日本の氷河 北アルプス立山連峰」
	11月10日 (土)		野外観 察会	日本第四 紀学会	埼玉県立川 の博物 館・自然の博 物館	彩の国さいたまで自然 の歴史を発見しよう
	11月11日 (日)	埼玉県立川 の博物館	ミニ講演 会	日本第四 紀学会	埼玉県立川 の博物 館・自然の博 物館	彩の国さいたまで自然 の歴史を発見しよう
	11月18日 (日)	岡山理科学 大学50周年 記念会館	特別講演 会	3 <sup>rd</sup> APLED	日本第四紀学会	
2013	3月3日 (日)	名古屋大学 環境総合館	第2回 評議員会			
	3月3日 (日)	名古屋大学 環境総合館	学会賞授 賞者講演 会	日本第四 紀学会		
	4月20日 (土)～21 日(日)		巡検	日本第四 紀学会		古環境変遷と千代川流 域流砂系からみる鳥取 砂丘の成り立ち
	5月19日 (日)～24 日(金)	幕張メッセ	日本地球 惑星科学 連合2013 年大会			
	5月23日 (木)	幕張メッセ	第3回 評議員会			
	6月22日 (土)	大阪大学 豊中キャン パス	特別講演 会	日本第四 紀学会	大阪大学	自然環境の過去・現在 から未来を見据える: 環境と自然災害

## ◆日本第四紀学会 2013 年度総会議事録

日時：2013 年 8 月 23 日（金）11:00～11:55  
場所：弘前大学教育学部 1 階大教室  
議長：中村俊夫会員  
出席正会員数 70 名、委任状 191 通、(名誉会員 1 名)

北村晃寿庶務幹事の司会により、まず大会実行委員長の檜垣大助会員（弘前大学）のあいさつが行われた。その後、斎藤文紀副会長があいさつを行うとともに、欠席された小野 昭会長のメッセージを読み上げた。続いて議長の選出が行われ、中村俊夫会員が選出された。定足数確認後、配布資料に基づき、下記の報告および審議が行われた。

### I. 報告事項

#### 1. 2012 年度事業報告

水野清秀幹事長より各事業の報告（本号「2013 年度第 1 回評議員会議事録」に掲載）が行われ、また逝去された会員に対して黙祷がささげられた。

#### 2. 2012 年度会計報告・会計監査報告

資料に基づき、水野幹事長より 2012 年度会計

決算報告が、また鈴木毅彦会計監査より会計監査報告が行われた。

#### 3. 2012 年度各委員会等報告

水野幹事長より、役員選挙結果、学会賞・論文賞等受賞者選考結果、2012 年度研究委員会報告、教育・アウトリーチ委員会報告などが行われた。また、前日の評議員会で承認された第四紀研究電子付録掲載に関する新たな規約と規定の一部改訂等の報告が行われた。さらに、国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会報告が斎藤文紀委員長より、学術会議 INQUA 分科会報告が奥村晃史委員長からそれぞれ行われた。

### II. 審議事項

#### 1. 2013 年度事業計画

水野幹事長より 2013 年度活動方針が示され、承認された。

#### 2. 2013 年度予算

水野幹事長より、資料に基づき 2013 年度予算案が示され、承認された。

## ◆「第四紀研究で電子付録が利用可能になります」

8 月 22 日の評議員会において、第四紀研究投稿規定の一部改正(案)、第四紀研究電子付録掲載要項(案)、日本第四紀学会編集委員会規程の一部改正(案)について審議し、承認されました。実施は、来年(2014 年)1 月 1 日からです。

投稿規定では、制限ページ数の増加と電子付録の追加が主な改正点です。電子付録は、原稿の掲載にあわせて、電子データを第四紀学会のホームページ上で公開することができます。電子付録の中身については、第四紀研究電子付録掲載要項をよくご覧ください。第四紀研究では初めての試みですので、会員の皆様の積極的な活用をお待ちしています。

## 第四紀研究投稿規定

(2011年8月26日, 2013年8月22日評議員会一部改正)

### 1. 投稿資格

投稿者の少なくとも1人は投稿時に本会会員であること。ただし、編集委員会による依頼投稿の場合はこの限りではない。

### 2. 第四紀研究に投稿しうる原稿

内容が日本第四紀学会倫理憲章前文にある第四紀に関わるものであり、体裁が別に定めた「執筆要項」に合致する、と編集委員会が認めたもの。

2-1. 言語：日本語または英語。

2-2. 原稿の種目

**論説 Article**：投稿者自身によるオリジナルで未公表の研究成果をまとめたもの。

**短報 Short Article**：研究の中間報告など大きな研究の一部をなすもの、および速報性を必要とするもの、および資料として特に重要なもの。

**総説 Review**：ある分野に関する研究成果を総覧し、総合的にまとめ、研究史、研究の現状、将来への展望などにふれたもの。

**討論 Discussion**：本誌に掲載された論説・短報・総説などについて、投稿原稿のかたちで1年間、コメント（賛否・注釈・質問など）を受け、編集委員会の判断により、意義のあるものを誌上に公開する。必要に応じて、原著者の回答も掲載する。

**資料 Note**：露頭・化石・遺物・景観などのスケッチ・写真および第四紀学的に貴重な標本・資試料などに平易な説明をつけたもの。

**口絵 Pictorial**：第四紀学に関連する露頭・化石・遺物・景観などの写真や重要な図などに簡単な説明をつけたもの。ただし、カラー化によって情報を出すことが不可欠であると編集委員会が認めたものに限る。

**解説 Comment**：第四紀学に関連するテーマ・用語などについての解説。

**講座 Lecture**：ある分野の研究の現状・成果や調査法・分析法などを、特に他分野の会員に紹介・普及する目的で平易に書かれたもの。

**書評 Book Review**：単行本などの内容の紹介および批評。

**雑録 Miscellany**：学会もしくは第四紀学に関する記事・報告など。ただし、編集委員会が認めたものに限る。

2-3. 原稿の長さ：総説は刷り上がり18ページ以内、論説・講座は16ページ以内、短報は6ページ以内、討論・解説・資料は4ページ以内、口絵・書評は2ページ以内とする。なお、刷り1ページは25字×43行×2段である。やむを得ず超過した場合は、その費用は依頼原稿を除き著者の負担とする。

2-4. 電子付録：著者の申し出があり、かつ別途定める第四紀研究電子付録掲載要項に基づいて編集委員会が適当と判断する場合、原稿の掲載にあわせて、原稿の内容の一部を第四紀研究電子付録として日本第四紀学会ホームページに掲載することができる。

### 3. 二重投稿・著作権

3-1. ほかの出版物に掲載済み、または投稿中の原稿は投稿できない。ただし、「第四紀研究」にふさわしく書き直されたものはこの限りではない。

3-2. ほかの出版物と重複した内容を持つ原稿は、投稿時に必ずその旨を明記し、投稿者自身で著作権問題を解決し、かつそれを示す資料を添える。

3-3. ほかの出版物より図・表などを引用する場合は、転載許可を受けるなど、投稿者自身が著作権問題を解決しておくものとする。

3-4. 掲載された論文の著作権（著作財産権、copyright）およびすべての媒体を通じての公表に関する権利は、著者が著作権等譲渡同意書に必要な署名をすることにより、日本第四紀学会に帰属するものとする。

3-5. 日本第四紀学会が著作権を保有する著作物を利用するにあたっては、別途定める出版物利用規定に従い、日本第四紀学会からの受諾を得るものとする。

### 4. 投稿手続き

投稿者は封筒に「第四紀研究原稿」と明記して原稿・図・図版・表・送り状のコピー3部とその電子ファイルを、必要な署名がされた投稿原稿内容の保証書とともに、編集委員会（本規定の末尾および会誌奥付の学会事務局の住所）に送付する。なお、編集委員会から要請があった場合には、図・図版・表の原図を提出する。

### 5. 受付

編集委員会が原稿を受けとった日を受付日とする。

### 6. 受付後の原稿の処理

6-1. 編集委員会は、投稿原稿の内容に応じてレフェリーを決め、査読を依頼する。

6-2. 編集委員会は、査読結果を参考に原稿の内容・表現に問題があると判断したときには、投稿者に修正を求めることができる。また「執筆要項」に従い、用語・用字などを変更することができる。活字の種類・大きさ、図表の大きさや全体の体裁は、編集委員会が決める。

6-3. 原稿が修正のため投稿者の手元にかえたまま、6ヶ月経過したときは、その投稿原稿は取り上げられたものとみなす。

6-4. 投稿原稿の受理は編集委員会が決める。編集委員会が掲載を決定した日付をもって受理日とする。投稿者は、編集委員会から投稿原稿受理の通知があった場合には、著作権等譲渡同意書に必要な署名をし、最終原稿とともに提出する。これにより、掲載が許可される。

6-5. ワードプロセッサ使用の原稿は、受理時の最終原稿の電子ファイルを提出する。

6-6. 受理後、原稿の細部の体裁は、編集委員会が調整・判断し、修正を求めることがある。

6-7. 投稿原稿の掲載不可は編集委員会が決める。掲載不可となった原稿・図・図版・表などは返却する。

**7. 校正**

著者校正は初校時のみ行う。著者校正時の加筆は原則として認めない。著者は、初校ゲラを受け取ったら速やかに校正を行ない、編集委員会（編集書記）に返送する。期日までに返送がない場合は、著者校正を省略するか、次号にまわすこともある。

校正時の著者責任による図・表等の差し替えにかかる費用は全額著者負担とする。

**8. 別刷**

別刷は50部単位で希望することができる。別刷費用については別途定める。掲載された原稿の電子ファイル（PDFファイル）は著者（論文責任者）に提供される。

**9. 原稿の返却**

掲載された原稿・図・図版・表などは返却しない。

掲載されなかった原稿・図・図版・表などは返却する。

**10. 投稿規定の改正**

この「投稿規定」の改正は、幹事会が原案を作り、評議員会に報告して承認を求める。「執筆要項」および「電子付録掲載要項」は編集委員会がこれを定め、改正があったときは幹事会に報告し、承認を求める。

\* 上記の投稿規定 2-3 超過分の著者負担は、1 ページにつき 10,000 円とする。

\* 原稿送付先：〒169-0072 東京都新宿区大久保 2-4-12 新宿ラムダックスビル 10 階 日本第四紀学会編集委員会

付則 本規定は 2014 年 1 月 1 日から実施する。

**第四紀研究電子付録掲載要項**

(2013 年 8 月 22 日評議員会制定)

**1. 第四紀研究電子付録の内容と条件**

第四紀研究電子付録(JAQUA Supplementary material)は、「第四紀研究」掲載原稿の内容の一部をなす図・表・図版・文字記述の電子ファイルであり、日本第四紀学会ホームページにアクセスできるすべての者に対して無償で配布される。また、第四紀研究電子付録（以下、電子付録とする）は、次の 1-1 から 1-5 の条件を全て満たすものとする。

1-1. 日本第四紀学会員を含むインターネットからのアクセスに対して公開することに一定の価値・意義が認められること。

1-2. 著者によるオリジナルのものであること。

1-3. 調査・実験・解析・計算等の一次データや事実の記載等であること。

1-4. 掲載予定原稿に、非常に重要な補助的情報であること。

1-5. 事前・同時に他所で公表して引用することが困難な内容と認められること。

**2. 投稿時の指定と本文での引用**

著者は、投稿時にあらかじめ電子付録とする図・表・図版・文字記述を指定し、通常の投稿原稿の図・表・図版と同様の形態で提出する。また、原稿の本文ではこれらを必ず引用する。

(例)・・・の結果を示す(図 S1, 表 S1, 図版 S1, 付録 S1, 英語論文の場合は, Fig.S1, Table S1, Plate S1, Appendix S1)。

**3. 掲載の決定**

編集委員会は、当該投稿原稿の受理審査時に電子付録の掲載の可・不可を決定する。

**4. 電子ファイルの形式と提出**

著者は、受理された電子付録を編集委員会の指定する電子ファイルの形式に変換し、編集委員会が指定した期日までに提出する。

**5. 掲載と掲載後の変更**

日本第四紀学会は、提出された電子ファイルを電子付録として日本第四紀学会ホームページの定められた場所に掲載する。編集委員会は、日本第四紀学会ホームページに掲載された電子付録について、内容の変更を伴わない表示形式等の変更以外、その内容の変更は行わないが、掲載中止は行える。著者は掲載された電子付録の内容の変更を編集委員会に書面にて求めることができる。編集委員会は、求められた変更の妥当性を審査し、適当と判断した場合には内容を変更する。

付則 本規定は 2014 年 1 月 1 日から実施する。

**日本第四紀学会編集委員会規定**

(2013 年 3 月 3 日評議員会制定, 2013 年 8 月 22 日評議員会一部改正)

(目的)

第 1 条 本委員会は日本第四紀学会編集委員会と称する(以下、委員会と呼ぶ)。委員会は、日本第四紀学会会誌「第四紀研究」(英語名: The Quaternary Research, 以下、会誌と呼ぶ)の編集を行い、同誌の

充実と円滑な発行のための作業を行う。

(構成)

第2条 委員会は、幹事会から選任された編集幹事2名と幹事会によって承認された編集委員並びに編集書記から構成される。編集幹事は委員会を統括する。編集幹事あるいは委員の少なくとも1名は電子ジャーナルの担当とする。

2. 大会時のシンポジウム等の内容をまとめた特集号については、上記委員会とは別に特集号編集委員会を組織できる。構成は、幹事会から選任された編集幹事2名と幹事会によって承認された若干名の編集委員ならびに編集書記からなることとする。

(業務)

第3条 委員会は、「第四紀研究」の編集業務を行う。また、電子ジャーナルとしての公開と維持に関する作業を行う。第四紀研究投稿規定と執筆要項・電子付録掲載要項、「第四紀研究」の体裁や内容の充実等について必要な検討を行い、その結果について幹事会に報告する。執筆要項・電子付録掲載要項に関しては委員会がこれを定め、改訂の必要がある場合には、幹事会に報告し、承認を求める。

2. 特集号編集委員会は、「第四紀研究」特集号の編集に関する業務を行う。特集号の編集業務は、通常号に準じる。

(原稿とその受付)

第4条

投稿の手続き並びに原稿の書き方は別に定める投稿規定及び執筆要項・電子付録掲載要項による。

2. 原稿は日本第四紀学会編集委員会に提出する。編集委員会の所在は、投稿規定の末尾及び最新の会誌奥付の学会事務局の住所である。

3. 委員会は、投稿原稿について受付処理をし、その受付年月日を記録し、原稿を保管する。原稿、送り状、保証書、電子ファイルがそろっていない場合には受付をせず、投稿者に確認する。すべてがそろった段階で受付とする。受付日は原稿が委員会に届いた日とする。委員会は、必要書類が整っている場合には、受付日を明記して受付の連絡を投稿者に行う。ただし、投稿原稿が投稿規定に明らかに反している場合には、受付前に理由を付して、原稿を投稿者に返却することができる。保証書の管理は学会事務局で行い、その他の受付処理は編集書記が行う。

(原稿の審査と採否)

第5条

委員会は、査読者を選定し、査読依頼を行い、査読結果の提出を求める。

2. 委員会は、投稿原稿について著者に修正を求めることができる。原稿が修正のために投稿者の手元に返ったまま6ヶ月経過したときは、その投稿原稿は取り下げられたものと見なす。ただし、特別な事情がある場合には委員会の審議を経て、期間を延長することができる。

3. 委員会が掲載を適当と認めた段階で投稿原稿を受理とする。委員会は受理年月日を記録し、投稿者に通知する。投稿者から最終原稿と必要な署名がされた著作権等譲渡同意書の提出をもって掲載許可とする。同意書の管理は学会事務局で行う。

4. 委員会が掲載不可と認めた原稿は、理由書とともに、投稿者に返却する。

5. 受付から受理あるいは掲載不可の決定までの原稿の状況管理は編集書記が行う。

(印刷と校正)

第6条 委員会は、原稿の入稿から校正、校了まで、会誌印刷のためのすべての作業について責任をもって行う。初校に限り、著者校正を行う。校正は三校まで行う。

(会議の開催と事務)

第7条 会議の開催は編集幹事が決める。会議開催に関する連絡や会場の準備等の事務は編集書記が行う。

(会計)

第8条 委員会の活動にかかる経費は会誌編集費から支出する。会誌編集費からの編集委員の旅費、通信費等の支払いや帳簿・必要書類の管理並びに学会事務局への決算報告等は編集書記が行う。

(規定の改訂)

第9条 本規定の変更は、幹事会の議を経て、評議員会の承認を必要とする。

付則 本規定は2013年3月3日から実施する。下線部は2014年1月1日から実施する。

## ◆公開シンポジウム

### 新第三紀の終焉と第四紀の始まり —東海層群から読み解く気候変動—

- 開催日程：平成 25 年 11 月 10 日（日） 13:00～16:30
- 開催場所：三重県総合博物館 レクチャールーム  
<http://www.pref.mie.lg.jp/SHINHAKU/HP/>
- 交通手段：津駅（JR 及び近鉄）から徒歩 25 分、バス 5 分
- 参加費：無料
- 主催：三重県、共催（予定）：日本地質学会、日本第四紀学会
- シンポジウムの概要

2009 年、新第三紀—第四紀境界が変更され、ジェラシアン期が第四紀に含まれることが国際的に定められた。この時期を境に気候変動が大きくなり、氷期と間氷期が繰り返されるようになった。三重県には新第三紀から第四紀にかけて堆積した東海層群の地層が広く分布している。近年、三重県立博物館を中心に東海層群にかかわる総合調査が行われ、多くの成果が得られてきた。

本シンポジウムでは、調査の結果明らかになった地質・微化石・大型化石等の研究成果を報告するとともに、これにもとづく総合討論を実施し、新第三紀—第四紀の環境変動についての理解を深める。

- プログラム案（敬省略） 各発表 15 分、総合討論 30 分

#### 1. 東海層群の地質

- ・堆積相—田中里志（京都教育大学）・居川信之（エイト日本技術開発）
- ・古地磁気層序—星 博幸（愛知教育大学）
- ・広域テフラ—田村糸子（明治大学）

#### 2. 鮮新・更新世の生物と古環境

- ・珪藻化石—宇佐美 徹（愛知県立杏和高校）
- ・淡水生貝化石—松岡敬二（豊橋市自然史博物館）
- ・花粉化石—齊藤 毅（名城大学）
- ・大型植物化石—百原 新（千葉大学）
- ・昆虫化石—森 勇一（金城学院大学）
- ・爬虫類化石—平山 廉（早稲田大学）
- ・哺乳動物化石—樽野博幸（大阪市立自然史博物館）

#### 総合討論

- 連絡先

住 所：三重県津市上浜町 6 丁目・一身田上津部田地内 三重県総合博物館内

電 話：059-228-2283（代表）

メール：nakagr00(at)pref.mie.jp（中川良平）

### ★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：齋藤めぐみ (memekato(at)kahaku.go.jp) 宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月 1 日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が出来た段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月 15 日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 国立科学博物館 地学研究部 齋藤めぐみ  
〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1 FAX：029-853-8998

広報委員：那須浩郎・糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://quaternary.jp/> から第四紀通信バックナンバーの PDF ファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル 10 階  
株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail：daiyonki(at)shunkosha.com 電話：03-5291-6231 FAX：03-5291-2176